

One-Way Gifts and Social Relations Among Rural Muslims in Bangladesh : A Case Study from a Village in the Tangail District

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 麦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004214

バングラデシュ農村における一方的贈与と社会関係

——タンガイル県，M村のムスリム集落の事例より——

西 川 麦 子*

One-Way Gifts and Social Relations Among Rural Muslims in Bangladesh: A Case Study from a Village in the Tangail District

Mugiko NISHIKAWA

This paper treats the subject of gift giving for merit without the expectation of any return from the receiver, a practice common among Muslims in rural Bangladesh. The three main examples are almsgiving, the provision of religious feasts and the sacrifice of animals. This paper is based on findings from a field survey which was conducted in a village in the Tangail District which I will refer to as M village. It consists of two settlements: a Muslim one and a Hindu one. Most Muslims in M village live in the Muslim settlement.

Many scholars have been studying the economic and political aspects of village life in Bangladesh by analyzing the social and economic relationships among the villagers. While the practice of one-way giving is essentially religious in nature, I will analyze its significance in village life by discussing the characteristics of the relationships which stem from one-way gift giving.

I will describe three matters. First I will discuss two kinds of religious feast, one held according to the Hijra calendar and the other as the need arises to pray to God for worldly benefits such as relief from disease, or for a good harvest or a healthy baby. Muslim male beggars called *fakir* and male villagers are invited to such feasts. Next I will describe the practice of the animal sacrifice in Eid-al-adha and the distribution of the meat. Finally I will treat three cases of the funeral rites and feasts. The families of the deceased vary greatly in terms of

* 金沢大学，国立民族学博物館共同研究員

Key Words : rural Bangladesh, Muslim, one-way gifts, social relation, ritual
キーワード : バングラデシュ農村，ムスリム，一方的贈与，社会関係，儀礼

economic and social standing in M village, and I will illustrate how these factors influence not only the scale of the feasts but the attitudes to them of the villagers.

I wish to analyze the one-way gift giving among Muslims in M village from three points of view. The first is that of the receiver of the gift. The gifts for religious merit are often said to be given to "the poor." However, there is neither a strict religious definition nor are there clear categories or castes of "the poor" in the Muslim society in Bangladesh. The second point of view is how villagers view the relationship between the giver and the receiver. From a religious point of view the gifts are given to God. However, they have great potential in the world to make the power relationships among villagers. The third point of view is in regard to the valuation of the gift by a third person and the prestige of the individuals and the social groups. All the gift giving treated in this paper is open to the gaze of a third person and to the information network.

The one-way gift giving for merit is an important religious practice for Muslims. However, most villagers, even if they are in poverty, don't like to become the receiver of the gift for fear of being defined as "the poor" and placed in a lower social status. They tend to avoid making individual relationships through the receipt of a gift.

The main receivers of alms are Muslim beggars called *fakir* and *fakir-ni* (female), who are in other respects normal villagers. The *fakir* occupation is assigned a religious role. The relationship between *fakir* and the giver of alms or the host of the feasts is more ritual than personal.

In regard to religious feasts there is no rule concerning guests with the exception of *fakirs*. For the host it is more important to gather an adequate number of people for the scale of the feast than to invite any particular persons. The host calls on neighborhoods or on the people who come to the Mosque in the Muslim settlement to pray on Friday afternoon. At the feast, as soon as the guests have finished eating they leave without enjoying conversation with the host and guests. The guests do not feel an obligation to return something to the host.

The one-way gift giving among Muslims in M village is neither regulated by village law, nor is it an obligation of particular posts within the village. The giving depends on individual intention. Among the villagers who are in the same economic conditions, some villagers give alms regularly and others rarely; some people serve dinner to hundreds of people for a feast and the others invite only a few *fakirs*. The villagers are conscious of the valuation by a third person which affects the dignity of an individual and his/her household. The accumulation

of such valuations in daily life determines the social standing of the villagers.

In the rural areas of Bangladesh it is difficult to find a clear social unit as a corporate group. In M village there is no special Muslim organization responsible for religious ceremonies. However, the villagers recognize their social boundary and themselves as Muslims of M village as distinct from "the others." During ceremonies they are sometimes united together. In Eid festival in M village, regardless of who sacrifices the animals a third of the meat is divided equally among all Muslim households of M village. In a large-scale feast in which most of the guests are the inhabitants in other villages, if the M villagers think it will affect the honor of their own village, they will work in a body for the success of the feast. I believe the awareness of the consciousness of "the others" is an important element for the people within a social boundary to help them rally together to protect the honor of their group.

はじめに	し、援助
1. 調査地の概略	2.1. M村のムスリム集落
1.1. 行政単位, 居住単位, 家族・世帯	a. 集落, 屋敷地の空間的構造
a. 行政単位	b. モスクと宗教的役割
b. 居住単位, 家族・世帯	2.2. M村のムスリムの宗教行事, 食事
1.2. M村	のふるまい, 動物供犠
a. 立地, 人口	a. ムスリムの年中行事
b. ショーマージ, 村, 集落	b. 宗教的食事のふるまい
c. 生業	c. 犠牲祭の動物供犠
2. ムスリム集落における一方的贈与	2.3. 葬送儀礼
——食事のふるまい, 肉の分配, 施	3. 考察

はじめに

バングラデシュの農村のムスリムのあいだでは、受け手からの直接の見返りを求めない一方的贈与がさまざまなかたちでみられる。宗教儀礼、通過儀礼における食事のふるまい、犠牲祭における供犠獣の肉の分配、儀礼や日常生活における施し、モスク、マドラサへの寄付、村人の特別な事情にたいしての金銭や物品による援助や、労働提供などである。本稿では、バングラデシュ、タンガイル県における実地調査にもとづ

き、さまざまな儀礼を通じてなされる一方的贈与の世俗的意味の考察をとおして、ムスリム集落における人々の社会関係の特徴をさぐってゆく。

このようなテーマを扱うにあたって、これまでのバングラデシュ農村における社会関係の分析視点について、本文の内容と関連する2つの問題点を述べておきたい。

第1点は、集団のとらえ方についてである。持続的かつコーポレートな集団や組織の有無に注目した場合、調査研究者にとってバングラデシュの村は、「集団的な組織が非常に弱い村という印象」¹⁾を与える。かつて Bertocci [1970] は、「とらえどころのない村」と題した論文において、バングラデシュでは、それ自体をひとつの持続的な社会としてとりだすことができるような社会的単位、共同体的村落を見出せないと述べた²⁾。Bertocci のこの論文以後、バングラデシュの村落の集団としての特徴を分析しようとする試みは少数の研究³⁾に限られ、「とらえどころのない村」像は、充分には批判、検討されてこなかったように思われる。

だが、実体としての村落の特徴とは別に、バングラデシュの村落のとらえ方について、研究者の側に次のような問題があったのではないだろうか。ひとつは、調査研究の単位についてである。バングラデシュ農村研究は多くの場合、village と訳されるグラム（複数ないしは単数の集落からなる。後述）、あるいはモウザ（英領期に導入された地租行政上の末端単位、グラムとモウザの境界は必ずしも一致しない。後述）を調査研究の対象として扱ってきた。グラムやモウザを調査分析の単位とすること自体については、ほとんどの農村研究において自明であるがごとく扱われ、あらためて議論されることがなかった。

これに対し、安藤・河合 [1989] は、「村に集団的組織性が見られないという場合『村』をどの範囲で区切るかということが問題となる」⁴⁾と述べ、従来の研究とは異なり、バラとよばれる集落こそが自然村的小集落であり、村落の集団の組織性を支えていると論じている⁵⁾。village（グラム、モウザ）を安易に分析単位としたため、あるいは分析者が設定した社会単位の枠から「村落」をとらえようとしたことによって、現地の人々が意識している社会的境界や集団意識を把握できなかったのではないだろうか。

1) 安藤・河合 [1989: 39]。

2) Bertocci [1970: 7]。

3) 安藤・河合 [1989, 1990], Barman [1988], Jansen [1987]。

4) 安藤・河合 [1989: 39]。

5) 安藤・河合 [1989, 1990] は、バングラデシュでの現地調査と英領時代の地租調査などの資料にもとづき、バングラデシュ農村の集落（バラ）の形成史の研究をすすめている。Settlement の諸形態、草分的父系集団、居住地と耕地ブロックの分布状況などから、バラという単位を分析している。

これまでの研究はまた、コーポレートな集団や既存の組織の有無だけに注目し、集団化、組織化のプロセスが考察されることは少なかった。現地の人々は、さまざまな社会的境界を意識している。どのような場面においてどのようなかたちでさまざまな社会的境界が表面化するか、人々が何を契機に集団として結束しどのように組織的な行動をとるか、その動的なプロセスを記述し分析しようとする試みがとくに欠けていた。

第2点は、社会関係の分析において階級が偏重されてきたことである。バングラデシュ農村の社会学的、人類学的研究では、経済的、政治的側面を重視する傾向にある⁶⁾。土地所有を基準として社会を階級に分類し、異なる階級間の垂直的關係、あるいは階級内での水平的關係を考察してきた。富裕層と貧困層との間の、搾取、力関係、パトロン—クライアント関係が強調され、また貧困層内での階級を基盤とした社会関係をとらえようとしてきた。

階級は、しかし、研究者が設定した分析枠組であり、現地の人々が用いる社会的カテゴリーではない。経済的差異を人々が認識していることと、そこに階級意識があるということは同じではない。人々にとって、貧しさとは相対的なものであり、「貧困層」という明確なカテゴリーがあったり、「土地なし層」という社会集団があるわけではない。階級分析は、人々自身がどのような社会的区分を意識しているか、自らを社会のなかにどのように位置づけるか、どのように社会関係を作りあげてゆくか、その多様な側面への考慮を欠く傾向がある。たとえば農村の宗教的行事、儀礼、食事の供应については、従来の農村研究では断片的にしか記述されず、また婚姻、とくにダウリーなど特定のテーマのみが詳細に論じられてきた。儀礼研究からバングラデシュ農村の社会・政治的関係をひろく考察しようとした試みは、Ellickson [1972] など少数の研究⁷⁾に限られる。

こうした問題点を指摘したうえで、以下では調査村のムスリム集落の社会関係や集団の特徴を考察してゆく。本文で具体的に扱うのは、ヒジュラ暦にもとづく年中行事、祈願儀礼、そして葬送儀礼の諸事例である。そこでは食事のふるまい、肉の分配、施

6) 1960年代以降のバングラデシュ（東ベンガル）の経済的側面を重視した人類学研究の傾向については、高田 [1991] が概観している。

7) J. Kotalová [1993] の10章では、バングラデシュ農村のムスリムの礼拝、葬式、食事の供应について述べ、(イスラム的な) コミュニティーとしてのショーマージ（本稿1.1.b.参照のこと）のイメージが、どのように作りだされてゆくかを論じている。この著作は、本稿のテーマと深くかわる内容を含んでいるが、筆者は校正の段階でこの書物入手したため、本文ではとりあげることができなかった。宗教行事や儀礼と村落の社会関係とのかかわりについてはこの他に次のような研究において、断片的にはあるが記述されている。Arens and van Beurden [1977: 31-32, 68, 144], Bertocci [1970: 85-87], Jansen [1987: 88-89, 134-135]。

し、援助など受け手から物品での見返りを求めないさまざまな贈与がみられる。一方的贈与の問題に焦点をしばることによって、「富裕層」と「貧困層」といった分類からはみえにくい社会関係のさらに複雑な側面をとらえることができるのではないかと考えている。調査村では、このほか、出産、割礼、婚姻の儀礼に際して食事のふるまいが行なわれる。この3つの通過儀礼では、食事に招かれた者からも金銭や物品が贈られる。結婚式では、取妻者側と与妻者側の双方が供応しあう。この論文では一方的贈与が行なわれる諸事例をとくに扱い、婚姻などの贈与交換については別稿であらためて論じたい。

ムスリムの宗教儀礼にともなう一方的贈与は、しばしば神と人間のあいだの贈与交換の枠組⁸⁾で論じられる。また嶋田 [1993] は、マルセル・モースが贈与を「全体的給付の体系」という観点からとらえ異次元交換に着目していることを評価し⁹⁾、嶋田自身が調査したレイ・ブーバのムスリムの「物乞い」や「お年玉」にみられる財貨とコトバや踊りとの交換を異次元交換の視点から論じている¹⁰⁾。本稿では、食事の供応、供儀、喜捨といった贈与の問題を扱うが、しかしそこから総体的な「交換体系」を論ずることを目的にしているのではない。バングラデシュ農村の世俗における人と人との社会関係や集団のあり方の特徴をさぐるひとつの重要な手がかりとして、一方的贈与の問題を取りあげる。

互酬や等価交換ではない物品や金銭、労働力などのやりとりに関しては、与え手と受け手の二者関係について多く議論されてきた。近年の南アジア研究では、異なるカースト間の交換について、贈与者の不吉や危険が贈与をとおして受贈者へ転化されるという議論¹¹⁾がある。また、バングラデシュの調査研究ではパトロンからクライアントへの庇護のかたちの一事例¹²⁾として、あるいは裕福な村人の威信の問題¹³⁾として描かれてきた。

こうした議論を検討しながら、次のような3つの側面に着目して記述と考察をすすめる。第1は、研究者が設定した「貧困層」というカテゴリーではなく、現地の人々が宗教的贈与の受け手をどのように設定しているかについて。第2は、一方的贈与の贈与者と受贈者とのあいだでどのような二者間関係が作られているか。第3は、一方

8) 大塚和夫 [1989: 121]。

9) 「異次元交換の人類学—モース『贈与論』の意味するもの—」[嶋田 1993: 226-270]。

10) 「非物質的価値の支配と権力—アフリカのイスラーム王国の事例から—」[嶋田 1993: 271-295]。

11) Parry [1989], Raheja [1988]。

12) Arens and van Beurden [1977: 144]。

13) Jansen [1987: 134-135], Ellickson [1972: 92]。

的贈与の世俗における第三者の評価¹⁴⁾と個人や集団の対外意識についてである。

1. 調査地の概略

本稿で扱うのは、バングラデシュ、タンガイル県、モドプール・ウボジラの M 村で、1988年12月から1991年2月にかけて、のべ1年5ヶ月間行なった調査資料である。この章ではまず、バングラデシュ農村の末端の行政単位と現地の人々が用いている居住単位や家族・世帯について説明し、次に M 村について概観する。

1.1. 行政単位、居住単位、家族・世帯

a. 行政単位

バングラデシュの農村部の最小の地方行政体はユニオンとよばれる行政村であり、これは、平均すると14ほどのモウザからなる。全国4401（1991年現在）のユニオンの平均人口は約25000人である。各ユニオンは3区からなる。ユニオン議会の議長1名と、各区から3名の議員が住民の直接選挙によって選出される。このほか、任命制の女性議員1名の議席がある。農村での、農業開発プロジェクトや洪水対策、郵便事業、保健衛生などの行政サービスが、ユニオンを単位として行なわれている。一般の住民にとっては、ユニオンが共同の生活の場としてとくに機能することはない。

モウザは、英領期に導入された地租徴収を目的とした行政上の単位である。その境界は、地図のうえでは明確に区分され、土地は一筆ごとの地籍の所有者が確定されている。モウザは公的な名称をもつ末端の行政区の単位であるが、各モウザに行政上の組織はなく、特別な役職もおかれていない。

b. 居住単位、家族・世帯

バングラデシュの農村には、グラム（村）、バラ（集落）、パリ（屋敷地）、ポリバー（家族）、カナ（世帯）といった単位がある。

グラムとは、複数ないし単数の集落（バラ）と集落の周辺の土地の集合である。物理的境界は明確ではなく、外観からはグラムの単位をとらえにくい。各グラムは地域の人々に認知されたそれぞれの名称をもつ。グラムは行政単位ではないが、しばしばモウザとグラムの領域が重なり、モウザとグラムが同じ名称でよばれている場合がある。しかし、グラムの規模は一律ではなく、複数のグラムが行政的には一つのモウザ

14) 鹿野 [1991: 37], Werbner [1990]。

であったり、複数のモウザが村人には一つのグラムと認識されている場合もある。行政単位と人々が用いる居住単位の境界が必ずしも同じではないことが、バングラデシュの村落を把握しにくいひとつの要因となっている。この論文ではグラムを「村」と訳している。

集落と集落のあいだはある程度の距離が離れている場合が多く、それぞれの集落は田畑より高く土盛りされ周囲を木々に蔽われているため、外観的に他の集落と区別することが容易である。村のなかでの位置や、集落の特徴によって、東バラ、南バラ、Yバラ、Xバラといったそれぞれの名称をもつ。世帯数の増加など集落の規模が大きくなると、分裂して独立した複数の集落が形成されることがある。集落は、人々の共同の生活の場として、経済的、政治的、社会的、宗教的な活動の核となることが多い。

集落は、バリとよばれる屋敷地が単数ないし複数集まって構成される。居住単位としてのバリという用語は、屋敷地そのものをさす場合もあれば、それを構成する世帯の集合を意味することもある。屋敷地は、複数あるいは単数の世帯の住居や台所小屋がひとつの中庭を取り囲むかたちで並んでいる。屋敷地全体は、バリの共有財産ではなくバリを構成する各世帯の所有地の集合である。男性に比べて集落外での行動を規制され、また田畑で働くことの少ないバングラデシュのとくにムスリム女性にとっては、屋敷地は、一日の多くの時間をそこで過す生活空間である。バリを構成する世帯群は、父系の親族関係にある場合が多いが、常にそうとは限らない。状況に応じて、バリが政治的、社会的単位として協同、結束することはあっても、日常生活においてバリの集団としての機能は弱い。

バングラデシュの農村にはこのほか、もめごとの裁定や寄合い、諸儀礼や宗教行事などを共同で行なうショーマージとよばれる社会単位が存在するが、その規模や機能はショーマージによって様ではない。複数の村、あるいはひとつの村内の複数、単数の集落から構成されるショーマージもあれば、ひとつのショーマージが分裂して、各集落が独立した新たなショーマージを形成してゆく場合もある。

ポリバル（家族）の基本的な成員は、夫婦と未婚の子供である。娘は、結婚後、一般的には夫方に居住し、夫のポリバルの成員となる。息子は結婚した順にいずれ親のポリバルから分かれ、同じ屋敷地内に新しい竈を作り独立したポリバルを築く。末の息子は、結婚後も親のポリバルにとどまるケースが多いが、常にそうであるわけではない。親子、兄弟などの複数のポリバルが同じ小屋に居住している場合は、それぞれのポリバルは別の竈を使用し、家計をともしない。また、複数のポ

リバールが、何らかの事情でひとつのポリバールとなるような場合は、竈を共有することになる。

誰が同じ竈から食事をとるかは、一つのポリバールの成員を他のポリバールの成員から区別する指標とはなるが、そうした者がすべて一つのポリバールの成員であるとは限らない。年契約の住込みの労働者や、通学のために一時的に親戚や知人宅に下宿している者たちは、他村に自分の所属するポリバールをもつ。

M村の場合ほとんどの住民は、それぞれが特定の一つのポリバールに属していると自他ともに認識されているが、例外もある。寡婦となった母親が、複数の息子たちの竈から食事を取り、経済的には息子たちのポリバールに依存して生活している場合である。その母親は、どの息子のポリバールに属するのか特定されていないし、またその母親だけが、独立したポリバールを形成しているともみなされていない。

カナ（世帯）は、同じ竈から食事を取り生計をともにする人々からなる。筆者の調査地では、ポリバールがその成員の社会関係を表わす意味合いが含まれるのにたいし、カナという用語は、経済的単位をあらわす文脈のなかで使われることが多い。本稿では、同じ竈から食事を取り、生計をともにする経済的単位を世帯とよぶ。また、同じポリバールに属すると認識されている者を、ここではその世帯の成員とみなす。住込みの労働者、下宿人は、あるポリバールと共住していても、世帯員として扱っていない。上述した寡婦の場合は、複数の世帯に属する者として扱い、その寡婦のみを独立した世帯とは数えていない。

1.2. M 村

a. 立地、人口

M村は、バングラデシュの首都ダッカから北西に約180 km、バスで4時間、小さな常設のNバザールで下車し、そこから徒歩15分ほどの距離にある。モウザとグラムの範囲が一致し、モウザ名、グラム名とも「M」という名称が使用されている。しかし、M村は、ここの住民も含めて、地域の人々からは、「X」という俗称でよばれることが多い。現在のM村は、ムスリム集落とヒンドゥー集落からなり、これらは北と南に100メートルほど離れている。村の周囲には、田畑を隔てA村、B村、C村、D村がM村の北、東、南、西の方向にそれぞれ位置している。

M村の世帯数、人口は、1990年6月現在、62世帯、318人。このうちムスリムは、38世帯202人、ヒンドゥーは、24世帯116人である。ムスリムのうち1世帯は、1970年代なかばに、D村からM村のヒンドゥー集落の南端に移り、現在もヒンドゥー集落

に住んでいる。他のムスリムの世帯はすべて北のムスリム集落に、ヒンドゥー世帯は南のヒンドゥー集落に居住している。これら62世帯は、ムスリムは11、ヒンドゥーは10のバリ（屋敷地）に分かれている。村人たちのあいだで、バリをひとつひとつ区別する名称はとくに用いられていない。

本文では、記述の便宜上、バリ、世帯、その世帯員を次のように表記している。21のバリは、M村のヒンドゥー集落の南端から順にムスリム集落の北端まで（西を上）に左から右へ）、A, B, C……Uと、大文字のアルファベットで表記する。このうち、Aバリ、Lバリ～Uバリの11がムスリムのバリ、Bバリ～Kバリの10がヒンドゥーのバリである。世帯については、バリ記号の横に同じバリ内の世帯を区別して、a, b, c…といった小文字のアルファベットをつける。たとえば、Qバリは、6つの世帯から構成されているが、これらの世帯はそれぞれ、Qa, Qb, Qc, Qd, Qe, Qf という記号で表わされる。バリのなかに一つの世帯しかない場合は、バリ記号＝世帯記号となっている。たとえば、Pバリの世帯は、世帯Pのみである。

世帯員は、ポリパールポリダン（ポリダン：長、ここでは世帯主と訳す）をエゴとし、世帯主との関係によって表わす。その場合、F：父、M：母、W：妻、H：夫、S：息子、D：娘、B：兄弟、Z：姉妹、という記号を組合わせている。また、世帯主は、世帯記号と一致する。たとえば、世帯Qbの世帯員は6人、その構成は世帯主Qb、その妻Qb・W、息子が3人Qb・S1, Qb・S2, Qb・S3、娘1人Qb・D1である。

b. ショーマージ、村、集落

M村、A村、B村の3つの村は、1970年代までは一つのショーマージであったという。3村が一つのショーマージであったときには、その内部のもめごとを調停するビチャール（あるいはシャリーシュ）とよばれる寄合いが共同で開かれていた。ショーマージ内の世帯は相互に宗教儀礼や通過儀礼などで食事に招き、ムスリムであれば犠牲祭のイードで供儀獣の肉を分配していた。現在ではこのショーマージは、M村、A村と、B村内の2つの集落との4つに分裂している。

調査時点でのM村は、A村、B村内の2つのショーマージとは区別されているが、M村内の2つの集落が常に一つのショーマージであると考えられているわけではない。A村、B村の住民はすべてムスリムであるが、M村の場合は、宗教が異なる2つの集落からなる。M村の村の名称Mとは、村人の説明によると、M村に土地をもっていたヒンドゥーの地主の名前に由来しているらしい。M村のヒンドゥーたちは、自分たちの集落をMとよび、それとは区別してムスリム集落をXとよぶ場合がある。

また、M村のムスリムたちは、ヒンドゥー集落のことをムスリムの村人どうしで話しているときにはマジバリとよぶ。M村のヒンドゥーたちが、魚とりを伝統的職業とする低いカーストに属し、マジとよばれていたためである。現在は、ヒンドゥーのなかでは魚とりを生業とする者はいない。このマジバリという呼び方には蔑みのニュアンスが含まれているため、ムスリムたちはヒンドゥーの前ではマジバリという呼び方をしない。なお、本稿では、「M村のムスリム集落」を、「ムスリム集落」ないしは「X集落」と記す。

宗教行事や儀礼においては、M村のムスリム集落、ヒンドゥー集落はそれぞれ別個の社会集団となる。ただしヒンドゥー集落に居住する世帯Aは、M村の他のムスリムと同様にムスリム集落の宗教行事に参加する。この論文でムスリム集落をひとつの社会集団としてとらえるとき、世帯Aもムスリム集落という社会単位に含まれるものとみなしている。ムスリムのなかにはM村のヒンドゥーの宗教儀礼を見物にゆく者もいるが、その逆はみられない。

一方、村の寄合いは、2つの集落を合わせたM村という単位で行なわれる。しかし、村の寄合いの現場ではヒンドゥーの発言力は弱い。ヒンドゥー集落で起こった事件やその調停にムスリムは積極的に介入するが、ムスリム集落での事件や寄合いには、ヒンドゥーたちはむしろできるだけかわりをもたないようにしている。もめごとや寄合いを中心となってまとめる村や集落の調停役、指導者はマトッボルとよばれるが、現在のM村では2つの集落全体を統率してゆくことができるような強力なマトッボルが欠けている。経済活動については、ヒンドゥー、ムスリムの各集落を個別にみてゆくよりも、M村という単位でとらえたほうが把握しやすい。

c. 生業

M村の世帯は、そのほとんどが賃金労働を含めて農業にだずさわって収入をえている。村の政治、経済に絶対的な影響力をもつような大土地所有者はいない。最も広い土地を所有している世帯であっても、その面積は9.8エーカーほどである。筆者が滞在していた時点で、土地の所有面積と農業外の定収入、そして世帯員の数を考慮して、村でも比較的安定した生計を維持できる世帯は13、これらの世帯の平均土地所有は約4.7エーカーである。残り49世帯の平均土地所有は、約0.7エーカーである。このうちの半数ちかくは耕作権をもつ土地をほとんど所有しておらず、自作による農業収入はのぞめない。土地は、ヒンドゥーでは息子たちへ、ムスリムでは娘へも息子の2分の1の割合で、分割相続されることになっている。今後さらに土地が細分化してゆ

く可能性が強い。

M村では、いくつかの種類の土地賃借方法はあるが、世帯員を養うだけの十分な土地をもたない世帯でも、生計において他人から借りた土地に依存する度合いは小さい。こうした世帯の収入は、主に賃金労働による¹⁵⁾。賃金労働には、年契約、日雇い、チュクティとよばれる特定の仕事の請負、という3種類がある¹⁶⁾。1989年には、M村の11世帯が1～3名の労働者と、最低500タカ（1992年現在／1ドル＝39.5タカ）から最高6700タカの年給で契約を結んでいる。

バングラデシュの季節は、乾季（10月から3月）と雨期（4月から9月）に大きく分かれる。日雇い労働、チュクティの需要は、乾季に作付けされるボロ稲と雨期に作付けされるアウス、アマン稲の農作業に大きく左右される。日雇い労働は、1日あたり3回の食事つき10～20タカ、食事なしの場合は10～30タカである。チュクティの労働内容は主に田植や土堀りであるが、何人かの村人が集まってグループで引き受けることが多い。たとえば、乾季のボロ稲の田植のシーズンには、M村では、住民数名から十数名で構成される大小のグループがいくつかできる。グループの主な構成メンバーは年によって異なり、ヒンドゥー、ムスリム、あるいは両者の混合のメンバーからなる。

M村では、ムスリムとヒンドゥーのあいだでも相互に雇用しあう。また、近隣の村々の住民や、農繁期には他県から仕事をもとめてやってくる労働者も雇われる。年契約、日雇い、チュクティのいずれの賃金労働についても、特定の個人のあいだで長期にわたる固定した雇用関係はみられない。年契約の場合も、長年にわたって同じ世帯で働く労働者は少ない。

M村の住民は、農業労働による収入のほかにも多種多様な収入の手段を組合わせて生計をたてている。女性が行なうヤギ、ニワトリ、アヒルの飼育は世帯にとっても重要な収入源である。ウシは、農作業に利用されるほか搾乳され、ミルクはバザールや定期市で売られる。村の4分の1の世帯では、2月下旬から4月にかけてジュリとよばれる米菓子を作り、定期市などで商品として売る。このほか季節や状況に応じて、雑貨行商、魚とりをしたり、資本のある者は、ジュートや米の仲買を行なう。

M村から3 kmほど離れたDバザールは地域の行政や商業の中心地であるが、こ

15) M村の女性は、屋敷地で行なう収穫物の処理作業や、屋敷地に接する畑の手入れをする者はいても、田畑に出て本格的な農作業を行なう者はいない。他の世帯の女性の仕事を手伝う場合は、報酬は現金ではなく主に精米が渡される。

16) このほかに労働提供の謝礼に御馳走をふるまうマグナカムラや、労働力を提供しあうダラカムラとよばれる労働交換のかたちがあるが、近年あまり行なわれなくなっている。

こには M 村の村人が経営する常設店（雑貨屋と機械部品屋）がある。このバザールの映画館にも、村人数名が働いている。このほか、D バザールとダッカを結ぶバスの乗務員、役所や軍隊の小間使い、人力車引き、N バザールの高校の教員が数名ずついる。遠方へは、ダッカへ高校教員として 1 名、タンガイルやチッタゴンの工場にも 1 名ずつ働きに出ている。

2. ムスリム集落における一方的贈与——食事のふるまい、供儀、施し、援助

この章では、M 村のムスリム集落における一方的贈与について、具体的な諸事例を記述してゆく。2.1.ではまず、M 村のムスリム集落を概観する。2.2.a.では、主にヒジュラ暦にそって行なわれる M 村のムスリムの年間の宗教行事を紹介し、2.2.b.で宗教的食事のふるまいの一方的贈与としての特徴をまとめる。2.2.c.では、年中行事のなかで唯一 M 村のムスリムの全世帯が関与する、犠牲祭の動物供儀をとりあげる。

2.3.では、葬送儀礼を扱う。死者や喪家の、経済状況や社会的位置づけが異なる 3 つの事例をとりあげる。死者や儀礼の主催者の個人的背景に焦点をあてながら、埋葬や死後の食事のふるまいのプロセスを記述してゆく。

なお、調査地においては、ムスリムの食事の招待、あるいは招待一般を意味するのにダワットという言葉が用いられる。ダワットのうち儀礼などで複数の者が招待される場合、その食事のふるまいはメジュバンとよばれる。

2.1. M 村のムスリム集落

a. 集落、屋敷地の空間的構造

M 村のムスリム集落は、南北に貫く小道に沿って、それぞれのバリの住居が並んでいる。図 1 は、ムスリム集落を構成するバリの配置を示している。道の東側には、M バリ、Q バリから分かれて新しく作られた N バリ、P バリがある。先に述べたように、ヒンドゥー集落の南端にはムスリム世帯 A が住んでいる。これらのバリを構成する世帯間の親族関係を、図 2 の系譜に示した。現在生きている人から 4 世代以上さかのぼって親族関係をたどることは難しい。血縁、姻戚関係は、個人を中心とした親族関係のネットワークとして重要である。バングラデシュでは父系親族集団をグスティとよぶが、M 村では、ムスリムやヒンドゥーのあいだで、あるグスティが他の

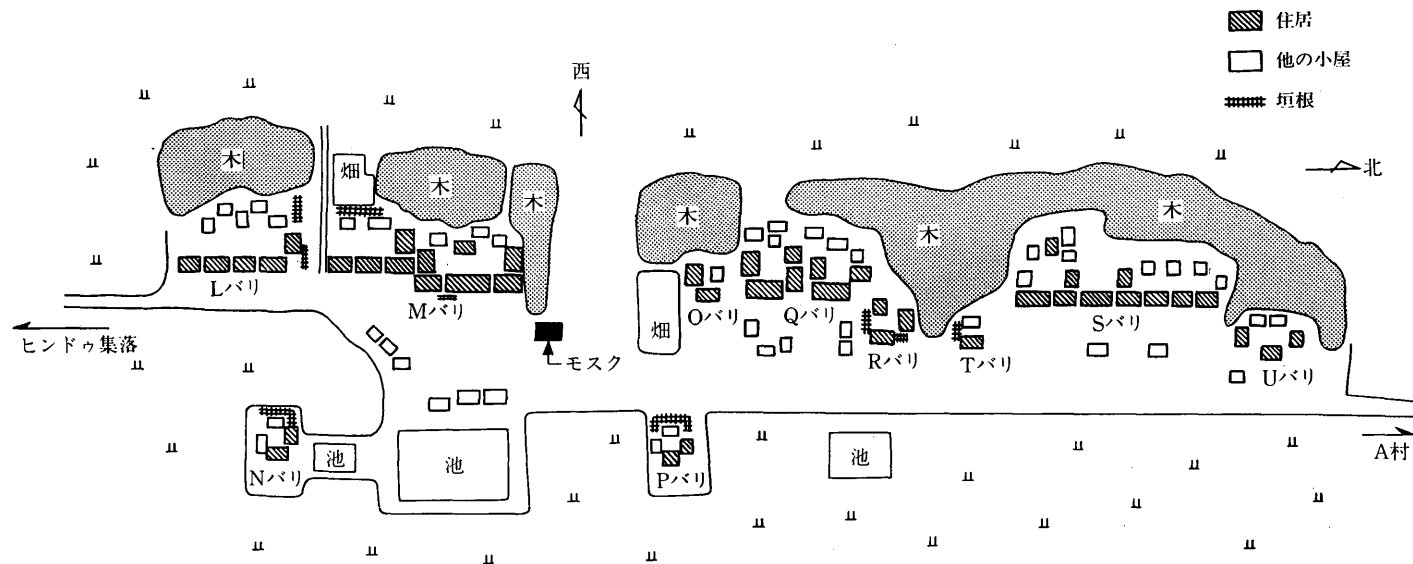


図1 M村のムスリム集落

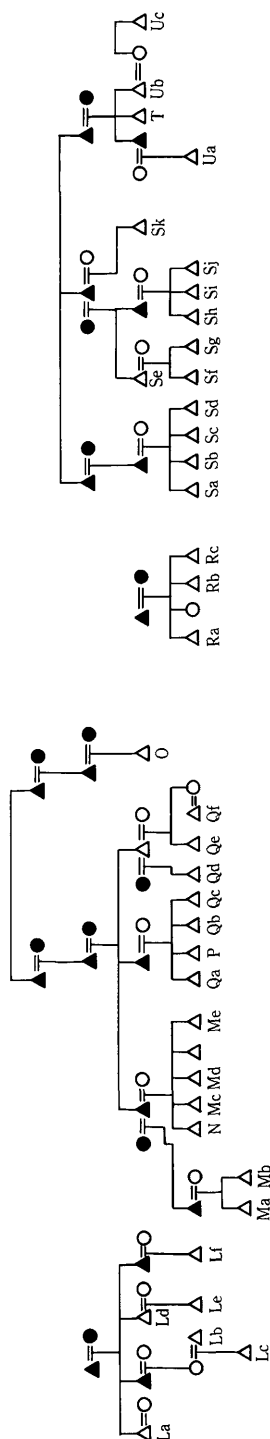


図2 ムスリム集落の世帯間の親族関係

グスティと区別される固有名称をもっていたり、祖先崇拜の儀礼が行なわれたりすることはない。

各バリの屋敷地の規模は一様でないが、空間的構造は共通している。どのバリにも必ず中庭の空間がある。それぞれの世帯の住居と台所小屋がその中庭を囲む。X集落では住居は道に面し、台所小屋は、中庭をはさんでそれぞれの住居と向かいあうかたちで建てられているものが多い。竈は、台所小屋と、屋外には中庭内の各住居の前に作られている。雨季には台所小屋の、乾季あるいは雨があがっているときには中庭の竈が利用される。台所小屋の裏には木々が茂っており、その向うに田畑が広がる。

住居の前の空間（中庭と反対側）は、パイレルバリ（パイレル：外の）とよばれる。ここでは、収穫後の農作物の処理、たとえば、稲の脱穀、粃、藁の乾燥などの作業を行なう。牛小屋は、パイレルバリや中庭にある。

中庭とそれを囲む小屋は、バリのウチの空間であり、とくに女性にとってはソトと区別された生活の場である。住居にさえぎられて外からはウチの空間が見えにくくなっている。各世帯の住居のあいだの間隔が広い場合は、外から中庭が見えないようにするため、竹やジュートの芯を組んだ塀がたてられ、ウチとソトを区切っている。村人や親しい親戚を除いて、成人男性がこの中庭に自由に出入りすることはない。長年のなじみの行商人であっても、M村の村人かあるいは少年でなければ、男性が中庭に入ってくることはない。女性であれば他村の者であっても、とくに住民に断ることなく中庭に入ってくる。

これにたいしてパイレルバリは、文字どおりソトの空間であり、また外部に開かれた公の場所でもある。他地方からやってきた日雇い労働者は、このバ

イレルバリで食事をとる。カチャリゴールあるいはゲストハウスとよばれる簡易な応接小屋は、バイレルバリに建てられている。X集落では2世帯がゲストハウスをもつ。結婚式や宗教儀礼の食事のふるまい、埋葬の際の村人による共同礼拝も、たいていはバイレルバリで行なわれる。こうしたバイレルバリでの行事には女性は参加しない。

外部の存在が強く意識されることがない限り、バリの女性たちは日常生活において中庭とバイレルバリとのあいだを自由に入出入りする。バイレルバリで収穫物を処理し、顔見知りの雑貨行商人、あるいはサリーや食器の行商人が来れば、バイレルバリに出てきたり、ソトに面した住居の戸口のところで交渉する。他村からX集落に婚入して間もない娘や裕福な世帯の女性は、貧しい世帯の女性に比べて行動範囲は狭くはなるが、集落のなかであれば、女性たちは一人でも他のバリを気楽に訪問する。実家を訪ねるなど、何か特別な事情や目的がない限り、一般には成人女性が集落の外へ出かけることは少ない。また、M村のムスリム集落の女性は、グラミン銀行の集会¹⁷⁾が開かれるなどの理由がない限り、ヒンドゥー集落を訪れることは珍しい。一部のヒンドゥー女性は、ムスリムに比べるとしばしばムスリム集落を訪問する。

b. モスクと宗教的役割

X集落にモスクができたのは、1970年代のなかばである。それまでは、M村のマトッポルであるMN・F（故人、Mc, Md, Me, Nの父、Ma, Mbの祖父）の家のゲストハウスを利用して、村人たちが礼拝を行っていた。集落内にモスクができるまでは、熱心に礼拝をする者は少なかったらしい。金曜日も、一部の者だけがDバザールや、隣のB村のモスクへ出かけて礼拝をしていた。MN・Fは、自分の屋敷地内の木を売った収益300タカを費用にして、自宅のそばにジュートの芯や竹や藁で小屋を作り、これをX集落のモスクとした。MN・Fが2度目のメッカの巡礼から戻って数年後のことである。現在のモスクは同位置にあるが、竹を編んだ壁にトタンの屋根でできている。なお、モスクで礼拝をすることができるのは男性だけである。女性がモスクに入ることは許可されない。

M村のムスリムのあいだでは、選定方法、在職期間、報酬が規定された宗教的役割はない。村の宗教的な役割としては、モウロビ（イスラム教の導師）と礼拝の呼びかけを行なうムヤジェムとの2つがある。M村のモウロビとみなされているMc（60才前）¹⁸⁾は、マドラサ（イスラムの宗教学校）に12年生まで通った。M村のムスリ

17) グラミン銀行による村の貧困世帯の主に女性を対象とした組合。会員に資本を貸し、彼らの生活改善を図る。村内で毎週集会が開かれる。

18) 年齢は調査時点での筆者のおおまかな推定による。

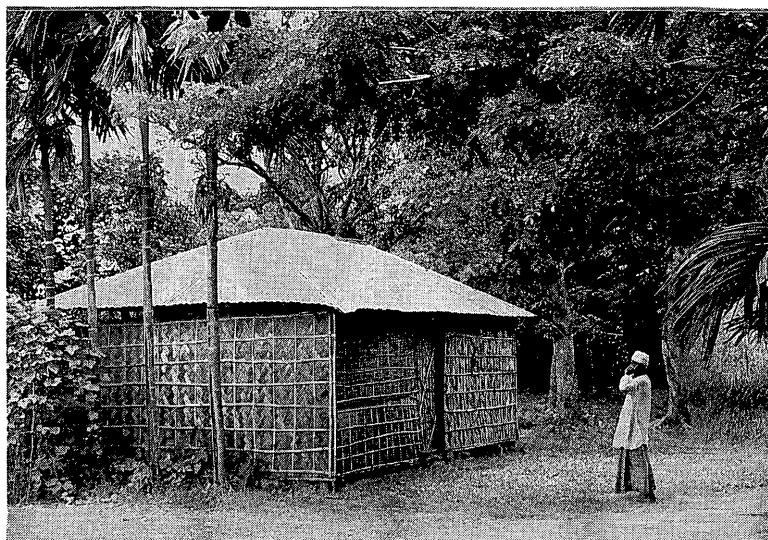


写真1 X集落のモスク（ムヤジェムがアザンを唱えている）

ムには、Mc 以上に高い宗教教育を受けた者はいない。X 集落でのウシ、スイギュウ、ヤギなどの供儀は、Mc が行なう。Mc は、村の祭儀の際に共同礼拝の中心人物となるが、他村のモウロビが依頼されることもある。Mc が日常的に村人に宗教教育を行なうなどといった、特別な活動は行なっていない。またモウロビであるからといって、強い発言力があったり、村人が Mc に対して特別な敬意を抱いているというわけではない。Mc の活動に謝礼は支払われていない。

ムヤジェム役については、O (75才) と Rb (30才前) の2人が交替で、1日5回、X 集落のモスクの前でアザンを唱える（写真1）。彼らは、広い宗教的知識をそなえているわけでも、他の村人と比べてとくに熱心なイスラム教徒であるというわけでもない。アザンを唱えることができる声をもっていることと、彼らの世帯が自給自足するだけの土地をもたないという二つの理由から、ムヤジェムとなったようである。アザンを唱える行為にたいして、村人から定期的に報酬が支払われるわけではないが、イードの礼拝のときに村人が持ち寄った米が与えられたり、村の食事のふるまいに多少とも招かれやすい。

2.2. M 村のムスリムの宗教行事、食事のふるまい、動物供儀

a. ムスリムの年中行事

M 村のムスリムの宗教行事、儀礼、あるいは毎日の礼拝や個人の祈りをふくむ宗

教的行為は、村人に義務づけられたものではなく、基本的には個人の主体性にもとづいて行なわれる。ヒジュラ暦にもとづく行事は、年に2回のイードの祭をのぞき、X集落で毎年必ず行なわれるとは限らない。ここではまず、筆者の滞在期間に行なわれたムスリムの宗教行事を暦の順に説明してゆく。

ヒジュラ暦は、ムスリムが宗教上の必要に応じて使用しているものであり、日常生活では村のヒンドゥーと同様ベンガル暦を用いている。高校以上の学校教育を受けた若者のなかには西暦を用いる者もいるが、一般の村人は使用しない。太陰暦であるヒジュラ暦の1年は、太陽暦のベンガル暦や西暦よりも11日ほど短く、ヒジュラ暦にもとづく年中行事の季節は毎年少しずつずれてゆく。主なものは次のとおりである。第1月ムハララム1日から11日のアシュラバロン、第3月ラビー・アリアッワル1日から12日のミラット、第8月シャバーン1日から15日のルティタワ、第9月ラマダーンの断食と第10月シャッワール1日から3日の断食明けのイード、そして第12月ズー・アルヒッジヤ10日から12日の犠牲祭のイードである。

ヒジュラ暦の第1月の1日から11日のいずれかの日に食事をふるまうことを、M村ではアシュラバロンという。ムハララム月の10日（アシュラ）は預言者の娘婿であるアリーの子フサインが、カルバラーの地で戦死した殉教の日である。アリーを預言者の跡継として支持するシーア派のムスリムは、フサインの死を悼む行事を行なう。M村をはじめ調査地域のムスリムはスンニ派に属するが、ムハララム月10日の行事は、バングラデシュの他の地域でもみられる¹⁹⁾。アシュラバロンでは、比較的裕福な世帯が、村のムスリム男性や子供たち、フォキール（ムスリム男性の物乞）²⁰⁾を食事に招く。主催者は、事前にフォキールに招きたい日時を伝えてあるのだが、この期間は調査地域のフォキールたちは、アシュラバロンの招待がいくつも重なって忙しい。その日に予定していた数のフォキールがそろわないこともある。

第3月の12日は預言者ムハンマドの生誕の日であり死亡した日とされている。村人は、1日から12日まで、X集落のモスクや村人の家に集まってミラット（複数の者がともにコーランを読唱する）を行なう。また、M村のムスリムのいずれかの世帯が自分の家に他村のモウロビを招く日もある。モウロビは、その家に集まってきたムスリムに、何日かにわたってムハンマドのライフヒストリーを聞かせたり、ハディースを説く。第3月のミラットへの参加は村人の自由であり、数十名が集まる日もあれ

19) バングラデシュのムスリムの多くはスンニ派であるが、筆者の調査地域以外にもムハララム月の行事が行なわれている [ELICKSON 1972: 82, 84]。

20) フォキール、フォキルニとよばれるムスリムの物乞についての詳細は、西川 [1992a, b, c] で論じている。

ば十数名のときもある。女性は参加できないが、場所を提供したバリの女性たちは中庭に座って、家のなかから聞こえてくるモウロビの話に耳を傾ける。

第8月1日から15日までのいずれかの日にルティタワが行なわれる。ルティ（小麦や米の粉を水あるいは湯でといて円形にのばして焼いたパン）にハルワ（ミルクに砂糖あるいは糖蜜をいれてあたたため米の粉でとろみをつけた甘い汁）をそえたものや、肉入りカレーライスを村人やフォキールにふるまう。村人の説明によると、この月の15日はアッラーが人々の翌年の運命を決める日であり、ルティタワを行なってこれまでおかした罪の許しを求め、来年の運命がよりよいものであることを願う。

第9月の1日からは断食が始まる。断食月の30日間、日中は、食事、水、しこう品など、いっさいのものを口にしてはいけない。各世帯では、女性が夜中に起きて食事の準備を始め、夜が明ける前に家族に食事を食べさせる。日が沈み、その日の断食が終わった直後に食べる軽食はイフタールとよばれる。イフタールは、季節や世帯の経済状況によって異なるが、普段は買ってきてまでして食べることの少ない果物や豆を使った料理、米菓子などを食べる。断食を続けている村人やフォキールをイフタールに招くことがある。M村でこの月の30日間の断食を実際にまっとうする者は多くなく、途中で断食をやぶってしまったからといって他の村人から非難されることはない。

第10月の1日から3日は、断食明けのイードの祭である。働きに出ている者たちや普段X集落に住んでいない村人も、休暇をとって家に帰り、最近嫁にいった者は婿を連れて実家に戻る。村のムスリムたちはみな、イードのために用意した新しい衣服や洗濯した服を着る。イードの日の各家の朝食には、キール（米を糖蜜と水で煮る）、シェマイ（米の粉の麺、ミルク、砂糖、月桂樹の葉などを煮る）、テールビタ（米の粉と糖蜜を水でこね油であげる）などが用意される。

イードの朝、男性はX集落のモスクに集まり共同で礼拝をする。X集落のモスクは30名ほどしか入れないので、入り口付近に藁や敷物をしき入りきれなかった人々はそこで礼拝をする。M村のムスリムのなかには、イードの礼拝に参加しない者や、Dバザールの大きなモスクへ出かけそこで礼拝をする者もいる。また、X集落のモスクの共同礼拝にA、B村の住民が参加することもある。イードの共同礼拝には、村人が少しずつ米を持参し、礼拝のあとムヤジェム役をしている村人などへ分ける。このほか、断食明けのイードには、裕福な世帯の者が各人1ロずつフェットラとよばれる施しを、特別な事情を抱えた貧しい村人や他村の親戚に渡す。フェットラ1ロ分の金額は毎年政府が発表する。

M村のムスリムにとって一年で最も大きな行事は、巡礼月にあたる第12月の10日

から12日の犠牲祭、イードの大祭である。断食明けのイードと同じく、午前中にモスクで共同礼拝を行ない、そのあと動物を供犠する。イードやその他のムスリムが行なう儀礼で供犠される動物は、バングラデシュではウシが最も多く、経済的余裕がなければヤギを用いる。供犠獣は、イードのために購入することもあれば、家で飼っている動物である場合もある。ウシの場合は、乳歯が3本以上永久歯にはえかわっている去勢牛、メスなら妊娠していないもの、ヤギの場合はオスは生後1年以上たっており去勢されたものでなければならない。

M村のムスリムは、複数の世帯が一緒となって共同で供犠動物を提供することが多い。毎年、数組が供犠を行なう。供犠には複雑なプロセスはない。ウシを横倒しにし、前足2本、後足2本を縄で括る。倒されたウシの首のあたりの地面に穴を掘る。何人かの男たちがウシの上に乗って押さえつけ、1人の男がウシの口を押さえ、できるだけ首が伸びるように引っ張る。村のモウロビであるMcが、ウシの喉に刃をあて、「ビスミッラ アッラフ アクバル（アッラーの御名においてアッラーは偉大なり）」と唱えて、頸動脈をひと突きで切る。村人が手分けして供犠とその解体を手伝う。肉の3分の2は、供犠動物の提供者のあいだで分けられ、残り3分の1は、M村のムスリム世帯で等しく分配される。供犠ウシの皮は売却され、その収入は、村や親戚の貧しい者たちに渡される。

ヒジュラ暦にもとづく年中行事のほか、個人（あるいは世帯）の意志にしたがって随時行なうチンニ（あるいはシンニ）とよばれる宗教的な食事のふるまいがある。チンニは、病気、難産、自然災害など何らかの困難に直面したときに、アッラーに救いを求め、これを切り抜けることができた際に人々に食事をふるまう。アマン稲の収穫を神に感謝して、11、12月にチンニを行なうことが多い。

ヒジュラ暦や季節とは無関係に、調査地域では、特定の日を施しの曜日と定めている。M村では月曜日が施しの曜日であり、毎週40人から80人のムスリムの物乞がM村を訪れる。物乞のなかには、M村のヒンドゥー集落をまわりヒンドゥーから施しを受ける者もいる。この曜日の施しは、パールビッカ（パール：曜日、ビッカ：施し）とよばれ、一握りの米が渡されることが多い²¹⁾。

以上がM村のムスリムの年間の宗教行事である。ここでみられるルティタワ、アジュラパロン、チンニといった宗教的食事のふるまい、犠牲祭のイードの供犠獣の肉やその皮を売った収益の分配、断食明けのイードのフェットラ、施しの曜日のパール

21) 施しの曜日や施しについては、西川 [1992b, c] を参照されたい。

ビッカ、などはすべて金銭や物品での見返りを受けない一方的贈与である。こうした宗教的な贈与は、それを行なう機会があらゆる村人に開かれているが、どの村人（世帯）にも義務づけられていない。個人（世帯）の希望により自主的に行なう、といった共通した特徴をもつ。

b. 宗教的食事のふるまい

宗教的な一方的贈与のうち、食事のふるまいについて、さらに詳しくその特徴をさぐってゆく。1989年1月から1991年5月までにX集落で行なわれたルティタワ、アシュラパロン、チンニという3つの宗教的食事のふるまいについて表1にまとめた。メジュパンを行なっているのは村でも比較的裕福な世帯であることが多い。表1で主

表1 M村のムスリム集落でのアシュラパロン、ルティタワ、チンニ（1989.1～1991.5）

年 (西暦)	月日	曜日	メジュパン の種類	主 催 者	参 加 者	
					(村 人)	フォキール
1989	8.11	金	アシュラパロン	Mc	Mb, Mb・S, Mc, Md・S, P, Qb, Qd, Rb, Sc, Lc・W, Sk・M, 子供, 隣村1	フォキール6人
	8.12	土	アシュラパロン	N	Mc, Md, P, O, Rb, Sc, Sk・M, 子供, 隣村1	フォキール5人
	8.13	日	アシュラパロン	Mc	Mb, Md, Md・S1, Md・S2, Mc, Mc・S, N, P, Qb, Qc, Qd, Qd・S, Rb, 子供	フォキール1人
	12. 1	金	チンニ（アマン 稲収穫後）	Qb	モスク（X集落）での金曜 日の礼拝参加者	
	12.15	金	チンニ（アマン 稲収穫後）	P	モスク（X集落）での金曜 日の礼拝参加者	
	12.22	金	チンニ（妹の難 産後）	Mb	モスク（X集落）での金曜 日の礼拝参加者	
1990	3. 9	金	ルティタワ	Mc, Md, Me, N	モスク（X集落）での金曜 日の礼拝参加者	
	11.23	金	チンニ（アマン 稲収穫後）	Mc	モスク（X集落）での金曜 日の礼拝参加者	
	11.23	金	チンニ（アマン 稲収穫後）	N	モスク（X集落）での金曜 日の礼拝参加者	
1991	2.19	火	ルティタワ	Qd	Mb, Mc, N	フォキール5人
	2.20	水	ルティタワ	Mb, Ma	Mc, N	フォキール7人
	2.22	金	ルティタワ	La・W	Lb, Lf, Ld, O, Rb	フォキール1人
	3. 1	金	ルティタワ	Mc, Md, Me, N	モスク（X集落）での金曜 日の礼拝参加者	フォキール1人

催者となっている世帯は、La・Wの世帯をのぞき、いずれも2エーカー以上の土地を所有している。La・Wは村でも最も貧しく、それまでルティタワを一度も行なったことはなかった。この年はルティタワを行なう時期が夫の一周忌にあたっただめに、村人数名を食事に招くことにした。

宗教的メジュバンの実施は、経済的状況が悪かったり、割礼、婚姻、葬送などの儀礼と時期が重なるとしばしば省略される。たとえば、1989年3月にはX集落ではルティタワはひとつも行なわれていない。前年の大洪水や台風の被害のあとで、どの世帯の経済状況も非常に厳しかったためである。1990年のアシュラパロンは、Mc, Me, Nの世帯がそれぞれ行なったが、翌年はいずれの世帯も実施していない。彼らの母親が死亡し盛大なメジュバンを行なったので、同時期にあたっただこの年のアシュラパロンは省略された。アマン稲の収穫のあとのチンニについては、以前に比べて行なうことが少なくなったという。1980年代に灌漑による乾季のボロ稲の栽培が広く行なわれるようになったため、村人にとってアマン稲の収穫の重要性が変わってきたのであろう。

アシュラパロン、ルティタワ、チンニの規模はいずれも小さい。客人の数は数人から30人ほどである。メジュバンを行なうかどうかを決定し、調理の材料を調達し、メジュバンの規模に応じた人数のフォキールや村人を集め、給仕をするのは、その世帯の男性、とくに世帯主が中心となる。規模の小さいメジュバンでは、動物が供儀されることは少ない。男性がバザールへゆき数キロの肉片を買ってくる。小規模な食事のふるまいの調理は、主催者の世帯の女性が行なう。

宗教的な食事のふるまいには、しばしばフォキールが招待される。フォキールニとよばれるムスリム女性の物乞は招かれない。チンニのメジュバンには、フォキールが招かれていないが、チンニと同様、神へ祈願、感謝を表わす行為として個人が随時行なうサドカとよばれる施しの受け手は、筆者の調査地ではフォキールに限られている²²⁾。M村のムスリムには、モノゴイを生業としている者はいないので、表1のフォキールはすべて他村の住民である。

フォキール以外のメジュバンの参加者は、A村、B村の住民が数名含まれることがときにはあるが、ほとんどがM村のムスリムである。こうしたメジュバンにふつう女性は招かれない。フォキール以外に特定の役職者や親戚、血縁を招待しなければ

22) 個人の自発的な喜捨を意味するサダカというアラビア語が、バングラデシュではサドカと発音されている。M村でのサドカの施しは、フォキールが村にモノゴイにやってきたおりに、村の女性から直接、あるいは子供をとおし渡されることが多い[西川 1992b:391-392]。



写真2 X集落のモスクの前でのチンニ（アモン稲の収穫に感謝して行なわれた）

ならないという規範はない。近隣の者や比較的頻繁に顔を合わせる者に声をかけたり、金曜日のX集落のモスクでの午後の礼拝を終えた人々や、御馳走を食べに集まってきた子供たちに食事をふるまう（写真2）。主催者にとっては、予定していた規模の人数を集めることが必要であり、村の誰に食事をふるまったかはさして問題とされない。

食事がふるまわれる場所は、モスクの前やバイレルバリが多いが、屋内の場合もある。人々は食事をするために集まり、客人どうしがゆっくりと会話を楽しんでいるといった様子はみられない。食べ終わると長話、長居などせず、それぞれの家へ戻ってゆく。ここでのメジュバンは、主催者や参加者のあいだで新たな社会関係を生みだす社交の場とはなっていない。アシュラパロン、ルティタワ、チンニ、そして後述する葬送儀礼のメジュバンでも、客人が主催者に現金や物品での贈物をしたり、別の機会に食事に招待する必要はない。M村のムスリム世帯のあいだでは、このようなメジュバンに招待し合うという関係はみられない。見返りを求めず食事をふるまったという事実が、宗教的メジュバンにおいては重要なのである。

c. 犠牲祭の動物供儀

ルティタワ、アシュラパロン、チンニは、それを行なう意志のある村人が主催し不特定多数の住民が参加する宗教行事であった。犠牲祭では、供儀獣の肉の分配をと

して、「M村のムスリム」という社会単位がより明確にあらわれる。これから犠牲祭の動物供儀、解体、肉の分配、ウシの皮の売却による収益の分配を、そのプロセスをおいながら記述してゆく。

M村のムスリム世帯のうち、毎年犠牲祭で供儀を行なっているのは、M, Nバリの世帯だけである。M村の半数以上の世帯が1エーカー未満の土地しかもたないなかで、この2つのバリを構成する6世帯(Ma, Mb, Mc, Md, Me, N)の平均土地所有は約4.9エーカーである。この6世帯の世帯主は、かつてM村のマトッポルであったMN・Fの息子や孫たちである。

Ma, Mbの父Mab・F(故人)はMN・Fの最初の妻とのあいだの一人息子である。その妻が死亡したあと、MN・Fは彼女の妹であるMN・Mと再婚し、N, Mc, Md, Me・B, Meの5人の息子がこの順に生まれた。MaとMbは、同じMバリに住む父の異母兄弟であるオジたちの世帯にたいして対抗意識が強く、イードの供儀や他の宗教行事に関してもオジたちとは別に独立して行なっている。MN・Mの5人の息子のうち4男のMe・Bは、高校教員として妻子とともにダッカに住む。筆者の調査時点では、Me・BはX集落に住む5男のMeと土地を共有し、Meと1つのポリバールとみなされていた。

1989年の供儀祭では、{Ma, Mb}, {Mc, Md, Me, N}, {P, Qa, Qb, Qc, Qe}の3組がウシの供儀を行なったが、ここでは、{Mc, Md, Me, N}の動物供儀を例にとりあげる。ウシは、イードの5日前、7月9日に他の村のムスリムから4100タカで購入された。この4100タカはMN・Mの5人の息子が5分の1ずつ、それぞれ820タカ出資した。

供儀動物の解体

午前9時すぎ、Mバリのバイレルバリでイードの礼拝が始まった。前日の雨でモスクの前に水がたまったので、この年は礼拝の場所を移した。礼拝にはM村のムスリム男性が80名ほど、そしてA, B村からも数名が参加した(写真3)。礼拝が終わるとすぐに、モウロビMcが、Qバリ、Mバリをまわって、3組の世帯のウシを次々と供儀してゆく。供儀動物を提供しなかった世帯の者たちも、希望者が3組に分かれてウシの解体を手伝う。

Mバリのバイレルバリでは、8名の村人(A, O, Qd, Ra, Sa, Sh, Si, Sk)とA村の男性1名が参加して、{Mc, Md, Me, N}のウシの解体作業が始まった。ウシの頭を切り離し皮をはぎとったところで、激しい雨が降りだした。修築中のMdの小屋のな

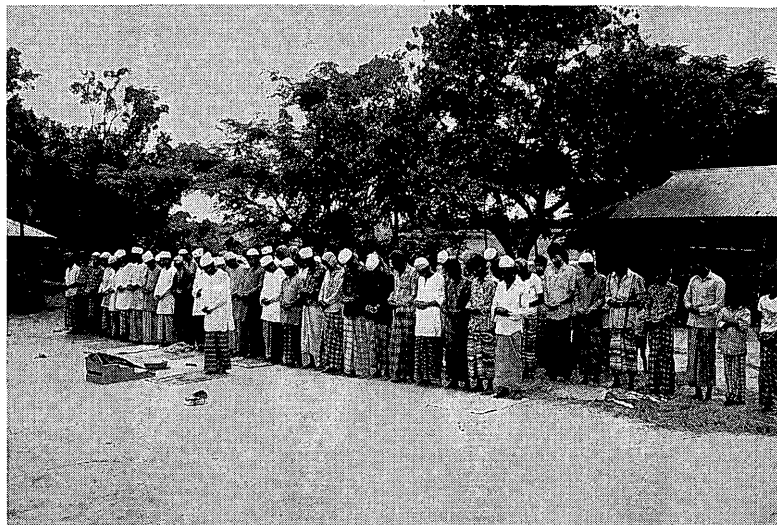


写真3 X集落での犠牲祭の共同礼拝

かにウシを運びこむ。小屋の中央にバナナの葉が何枚もひろげられ、その周囲の地面の上で解体作業が手際よく続けられた。ウシの頭以外の部位は最終的に、一片5センチほどの大きさに切る。そして1. 肉のみ 2. 骨付き 3. 内蔵、と3種類に分けて、バナナの葉の上に山盛りにしてゆく。ウシの出資者たちは小屋のなかに座って作業を指図し、村の子供たちが作業を見物しながら肉の分配を待っている。

肉の分配

3種類に分けられた肉片の3分の2を、まず出資者のあいだで分ける。このウシは4世帯から5口分に分けてお金を出し合って購入した。したがってこの2/3の肉片を5口分における。1口分は全体の2/15となる。3種類の肉の山から、2/15ずつが Mc, Md, N に渡される。Me と Me・B は1つの世帯であるが2口分を出資したので、4/15の肉が渡される。

全体の3分の1の肉は、所有者以外のムスリムの各世帯に均等に分配する。その分配を行なう前に、解体を手伝ったA村の村人に3シェル（シェル：約1kg弱）の肉が、M村のムスリム8人には1シェルずつの肉が渡された。残りの肉を、M村のムスリム世帯に分配する。この年のイードの時点でM村のムスリムの世帯数は38であるが、その他に個別に肉をもらうためにMバりにやってきた寡婦 Sk・M のために特別に1口分が加えられた。したがって、M村のムスリム世帯に関しては、ウシの出

資者である Mc~N の 4 世帯を除く、34世帯と Sk・M をあわせた35口分と計算された。また、出資者の世帯 (Mc, Md, Me, N) で年契約の住込みで働いている労働者たち 4 人もそれぞれ 1 口分とみなされ、計39口、念のため余分に計算して42口分に残りの 3 種類の肉が分けられた。M 村の各世帯の者たちがそれぞれ容器やバナナの葉を持ってきて、1 口分の肉を持ち去った。ここでは、{Mc, Md, Me, N} の供儀を例に記述してきたが、肉の 3 分の 1 が出資者以外の M 村のムスリム世帯に分配されることは、他の組の動物供儀についても同様である。

牛皮の売却と収入の配分

牛皮は、650タカで売られた。この収益は、ウシの出資者のあいだで 5 等分し、Mc, Md, N が130タカずつ、Me と Me・B が合わせて260タカを受け取った。イードで供儀したウシの皮を売った金は、M 村のムスリムに限らず他村の親戚や近隣の貧しい者たちに分配される。この金は、マレールタカとよばれる。マレールタカは、村人なら、家によく働きにきてもらっている女性、比較的親しい関係にある者、他村の親戚や知人の場合は、高齢の寡婦、何か特別な理由で経済的に困窮している者などに渡す (表 2 参照)。その他、マドラサなどにも寄付する。

以上が、M 村の犠牲祭での供儀から肉の分配までのプロセスである。ヒジュラ暦第12月、巡礼月の犠牲祭は、アブラハムの故事にならって全世界のムスリムが行なう祭である。バングラデシュでは、ダッカのような大都市の路地でも、全国の農村部で

表 2 マレールタカの配分 ({Mc, Md, Me, N} のウシ供儀, 1989.7.14)

与え手	Mc…総額100タカ	Md…総額130タカ	Mc, Me・B…総額250タカ	N…総額60タカ
	Le・W…10タカ O…20タカ Ra…10タカ Se・S3…10タカ (教育費) Mc・WBS…10タカ (他村・親戚) MN・FZSW…10タカ (他村・親戚・寡婦) MN・FZDD…10タカ (他村・親戚・寡婦) マドラサ…20タカ (D バザール)	Le・W…10タカ O…10タカ Mc・WBS…90タカ (他村・親戚) マドラサ…20タカ (D バザール)	Le・W…20タカ O…30タカ Ra…20タカ Se・S3…10タカ (教育費) Md・WBS…40タカ (他村) MN・FZSW…10タカ (他村・親戚・寡婦) MN・FZDD…20タカ (他村・親戚・寡婦) Mc 宅で働いていた老婆…10タカ (他村) Mc・W の実家にいる老婆…10タカ (他村) マドラサ…40タカ (D バザール)	Le・W…20タカ Sf…20タカ マドラサ…20タカ (D バザール)

も、ウシやヤギが供儀される。供儀を行なった者は、肉の3分の1を自らが受け取り、残りは、3分の1は親戚、知人に、3分の1は貧しい者へ分配するのがよいとされている。

X集落の供儀祭は、M村のムスリムという単位で行なわれる行事である。供儀動物の肉は、村内のムスリム世帯へ無条件で分配される。供儀動物の解体作業にまったく参加しなかった世帯も、自分が出資して動物供儀を行なった世帯でも、他の世帯の供儀動物の肉1口分を受け取ることができる。このほか供儀を行なった世帯で住込みで働く他村の労働者や、解体を手伝った隣村の男性に肉を分配することもある。しかし、他村の親戚に肉を配ったり、また他村の住民や物乞が肉やマーレルタカを求めてX集落にやってくることは、筆者の滞在期間の2回の犠牲祭においてはみられなかった。

M村以外の村々においてはグラムやパラが常に供儀肉の分配の単位となるとは限らない²³⁾。M村でも、A村、B村、M村の3村がひとつのショーマージと認識されていたところには、イードの供儀動物の肉は、3村内のムスリムの世帯に分配されていたという。M村の西隣のD村では、ひとつのグラムが4つのショーマージに分かれ、供儀の肉は、それぞれのショーマージ内で分配している。現在のX集落に関しては、供儀祭の肉の分配からは、「M村のムスリム」というひとつの社会単位が存在することがわかる。バングラデシュ農村一般について論ずる資料を筆者はもたないが、少なくともX集落の犠牲祭は、人々が意識するひとつの社会的境界のなかで行なわれている。

2.3. 葬 送 儀 礼

M村では、ムスリムが死ぬとその日のうちに、あるいは翌日できるだけ早く埋葬する。死者や遺族の経済状況にかかわらず、葬式には複雑なプロセスはない。遺体を洗い、死装束を着せ、村人や集まった親戚が共同で祈り、遺体を墓穴に埋める。死後5日、10日、40日に、フォキールをはじめ、村人や親戚を食事に招く。命日や死後の日数とは無関係にメジュバンを行なう世帯もある。

葬送儀礼のメジュバンの規模は、死者や喪家の経済状況、社会的地位、親族関係などの相違によって一様ではない。客人の数が数名から多いときには500名をこす(表3)。規模の大きなメジュバンになると、メジュバンの主催者だけでなくM村のムス

23) 調査地域の他の村や集落においては、犠牲祭において供儀を行なう世帯がひとつもない場合がある。

表3 M村のムスリム集落での死後のメジュバン (1989.1~1991.5)

年 (西暦)	月	日	故人	メジュバンの名目 ^{*1}	主催者	参加者		
						M村・他村 ^{*2}	フォキール	その他
1989	1.21	土	Qc・B	一周忌	Qc	M村150人	フォキール11人	
	5.5	金	Mab・F	命日	Ma, Mb	M村30人	フォキール2人	ハフェージュ ^{*3}
	8.24	木	Uc	死後40日	Ub	M村0人	フォキール2人	モウロビ1人
	9.6	木	Qc・M	死後40日	Qc	M村0人	フォキール2人	モウロビ2人
1990	1.5	金	MN・F	命日	Me	M村40人	フォキール11人	
	1.12	金	PQabc・M	死後10日	P, Qa, Qb, Qc	M村100人	?	
	2.9	金	PQabc・M	死後40日	P, Qa, Qb, Qc	M村10人	フォキール2人	
	2.28	水	La	死後5日	La・D1H, La・D2H	M村0人	フォキール5人	
	3.8	水	La	死後10日	La・D1H, La・D2H	M村140人他村	フォキール?人	
	5.5	土	Mab・F	命日	Ma, Mb	M村多数	フォキール14人	
	6.15	金	PQabc・M	死後の日数と無関係	P, Qa, Qb, Qc	M村10人	フォキール5人	モウロビ1人
	7.2	月	MN・M	死後5日	Mc, Md, Me, N	M村0人	フォキール5人	
	7.5	木	Qc・B, Qc・M	死後の日数と無関係	Qc	M村多数, 他村75	フォキール?人	
	7.6	金	MN・M	死後の日数と無関係	Mc, Md, Me, N	M村と他村600人	フォキール?人	
	8.6	月	MN・M	死後40日	Mc	M村10人	フォキール10人	
	1.13	日	Qb・W	死後10日	Qb	M村と他村90人	フォキール10人	モウロビ1人
1991	2.17	日	Qb・W	死後40日	Qb	M村数名	フォキール5人	
	5.5	日	Mab・F	命日	Ma, Mb	M村30人	フォキール8人	

^{*1} 例えば死後10日目のメジュバンであっても、正確にその日数の日にメジュバンを行なうとは限らない。

^{*2} 参加者人数は概数。

^{*3} ハフェージュはコーランを暗唱できる人。

リムが、他村の村人へ食事を供するホスト役の立場にたつことになる。

この節では、社会的位置づけが大きく異なる3人の村人の死、埋葬、メジュバンをとおして、死者や喪家をめぐる村人の社会関係、メジュバンの主催者の威信や村人の集団意識について考察してゆく。

事例1でとりあげるのは、土地を持たない一人暮らしの男性 Uc の死である。結婚した妹が住む M 村と親戚がいるディナジブール県との間を何度も移動して暮らした。最後は多少の借金だけを残して X 集落で急死した。事例2は、零細地片を所有する高齢の男性 La の死後のメジュバンを扱う。死亡した La には息子がなく、娘2人は婚出している。メジュバンの主催者となるのは、他村に住む La の娘の夫たちである。事例3では、寡婦 MN・M の死後の盛大なメジュバン(約600人)を記述する。MN・M の5人の息子の各世帯は、ムスリム集落では最も裕福である。

事例1 土地なし Uc の葬式

Uc の急死

Uc が生まれたのはジャマルプール県のニカルパラという村だった。インドのアッサム地方で幼少時代を過した。インド・パキスタンの分離後、Uc の父親は、ヒンドゥーと土地を交換して家族とともに D 村へ移住した。独立戦争のあと土地が安いというので一家は、ディナジプール県へ移った。その後 Uc は、アッサムから移住した親戚が当時住んでいた M 村とディナジプール県を、死ぬまで何度も往復した。政府による貧困層への安価な土地譲渡の噂を耳にすると、チッタゴンまで行ったこともあった。移動のたびに幾度も離婚と結婚を繰り返した。最初の妻とのあいだに生まれた娘が2人いる。長女は M 村の近隣の村へ、次女はディナジプール県へ嫁いだ。Uc は、死亡したときには、X 集落の Ub と結婚した妹 (Ub・W) が住む U バリの北端の小屋に一人で住んでいた。土地を全く所有せず、日雇い労働をして暮らしていた。

1989年の犠牲祭のイードが終わった翌日7月17日の夕食後、Uc は胸が痛いといって急死した。U バリの男性は D バザールへ出かけて不在だった。里帰りしていた Uc の長女 (Uc・D1) と、Uc の妹 (Ub・W)、妹の夫の甥 (Ua) の妻 (Ua・W) の3人の女性のみがバリに残っていた。集まってきた村人たちは、翌日早朝に埋葬を行なうことを打合わせると、それぞれの家へひきあげた。

埋葬の準備

翌日、夜明けとともに村のムスリムたちが手際よく埋葬の準備を始めた。Uc の遺体は布を体じゅうに巻きつけられ頭を北にして小屋のなかに安置されていた。前夜 D バザールで Uc の死の知らせを受けた Ua が、死装束の白い布、線香、身体につける香水、衣服にふりかける香水、石鹼、油など、埋葬に必要な物を買ひ揃えた。村人からは、埋葬費用をまかなうためのお金と埋葬に必要な竹が集められた。集まった寄付は合計125タカ、Mb, Me, N, Ua がそれぞれ20タカ、Sa, Sb, Si, Sj, Sk が5タカずつ出し合った。竹は、O, T, Ua が1本ずつ、Ub が2本提供した。

埋葬の準備は、近隣の者たちが中心となって行なった。埋葬のプロセスは次のとおりである。個々の作業を記述したあとに、Uc の埋葬についてその作業を担当した村人を括弧のなかに記号で記しておく。

Uc の小屋の裏に墓穴を、縦が死者の肱から指の長さの5.5倍、横は2.5倍、深さは死者の腰の高さ（女性は胸の高さ）をめやすにした直方体に掘る (Qb, Ra, Sb, Sd, Sh)。この墓穴が棺桶のかわりになり、死体は墓穴の地面の上に直接葬られる。死者

の頭を北に顔は西を向くように墓の方向を決める。竹は適当な長さに切りそろえ、それで死体を乗せて運ぶための担架を作る (Ra, Sd, Sf, Sh, T) はか、墓穴をふさぐのに使う。

Uバリの女たちが、台所小屋で遺体を洗うために大きな鍋で湯を沸かした。鍋のなかには、ボロイの葉5枚、ザクロの葉5枚、ドゥブラ草5本、グタシヨース（香辛料）が入れられた。Ucの小屋の横に、遺体を置くための木製簡易ベッドと腰掛を設置する。遺体運び出しベッドの上に置くと (Qb, Qd・S1, Qe, Sf, Uc・BWF), その周囲に竹の敷物を塀としてめぐらした。外から内側が見えないようにするために、真っ赤なショールが1枚その敷物の隙間に掛けられた。隣のSバリの男性とUcの親戚が、鍋の湯を使って遺体を洗った (Sb, Se, Sh, Uc・D1HFB)。

縫目のない白い布で遺体を包むことをカフォンという。この布は男性3枚、女性5枚。そのうち1枚は、布の中央に三角の穴があいている。その穴から頭を入れて貫頭着のように死者の体にかける。中庭に置かれた担架の上に、これらの布を重ねて敷く。そこへ、体を洗い布で包まれた遺体が置かれた。穴があいている最初の1枚の布を死者にがぶせながら遺体を包んでいた布を剥がしていく。遺体と布に香水をかける。男性の場合残り2枚、女性の場合残り4枚の布で体を包む (Ub, Uc・BWF, B村のモウロビ)。そして両端を束にして紐でしばると、遺体は寝袋に入れられたような形となった。

カフォンがすむと、4人の男が担架に乗せた遺体を、バリの中庭からバイレルバリへ運んだ。遺体の頭を北の方向に向けて担架を降ろす (A, P, Sc, Ub・BWF)。再び香水がふりかけられた。

Ucの借金の清算と埋葬

遺体がバイレルバリに運ばれると、それぞれ水浴びをすませた村のムスリム男性たちが集まってきた。腰巻の上に洗ったシャツやパンジャビを着て、頭には白いトゥピ（縁なし帽子）をかぶるか布を巻いている。周囲の村のUcの親戚たちにはすでに葬式の知らせが伝えられている。葬式の祈りを始める前に村人たちは、Ucが生前借金をしていなかったか、もしUcに金を貸している者がいたら申し出るようにと確認した。M村の村人たちは誰も死んだUcから金を返してもらおうとはしない。ただ1人、隣村の男性が、Ucに100タカ貸したままだと言う。M村のムスリムたちは、村人から金を集めてUcの借金を返すことにした。

借金の清算についての話合いが終わると、Uバリのバイレルバリに集まった110人

ほどの人々が Uc の遺体を前に西を向いて 3 列に並んだ。女たちはバリの中庭のなから外へ出てこない。B 村の村人がイマモティ（礼拝の際人々の前に立ち祈る人）となり、葬式の祈りが始まる。このあと遺体が墓穴まで運ばれた。

死体を埋葬することをダフォンという。埋葬の際には、3 人の男が墓穴に降り、遺体を受け取る（Sf, Uc・D1HB, Uc・BWF）。遺体が墓穴に降ろされると、穴を竹で覆った。乾季であれば、墓穴に蓋をするように地面に水平に竹を並べ、墓の中に直方体の空間を作る。雨季は、空洞が大きすぎると水分を含んだ土の重さによって墓穴が崩れる可能性があるため、竹を穴の上から底へ斜めに並べて、墓の空間を狭くする。竹を敷きつめるとその上に、掘った土を戻してゆく。墓穴がおおかた土に覆われたところで、参列者たちが 1 人ずつ、墓にひとすくい土をかけた。墓穴の空洞分だけ土が盛り上がる。その 4 隅に、コーランを唱えながらケジュールの枝を埋め、担架に使った 2 本の長い竹を墓の上に置いた。参列者はもう一度バイレルバリに戻って、皆で最後に短く祈り Uc の埋葬を終えた。

死後 5 日、10 日のメジュバンは行なわれなかった。40 日目、Uc の 2 人の娘と弟が X 集落を訪れた。この日には、Ub が、B 村のモウロビとフォキール 2 名を招待して食事をふるまった。

事例 2 La の不本意なメジュバン

La の親族と L バリ

La の母親 La・M は、X 集落に生まれた。La・M には兄弟が 4 人いたが、1 人は他村へ婿入りし、1 人は結婚後子供ができず、1 人は未婚で死亡し、1 人はインドへ移住した。他村へ婚出した La・M は、結婚後土地を失った夫とともに X 集落の実家に戻ってきた。La・M には 4 人の息子と娘が 1 人生まれた。その長男が La であり、La の兄弟やその子供たちの 6 世帯が L バリを構成している（図 2 参照）。これらの 6 世帯は村でも最も貧しく、世帯平均約 0.24 エーカーの土地しか所有していない。

La は、1920 年代に当時 10 才にならない娘（La・W）と結婚した。結婚後 10 年をすぎてから長女（La・D1）が生まれ、長女が結婚し出産したあとに、La の次女（La・D2）が生まれた。La に息子はなく、La は高齢になると自分の 0.55 エーカーの土地を、他村に住む 2 人の娘の夫、La・D1H と La・D2H とに貸し、収穫の半分を受け取っていた。

La の埋葬とその後の話合い

1990 年 2 月 24 日の夜中、La（80 才）は死亡した。乾季の短い冬の終わり、季節が変

わり始めたころだった。冬のあいだずっと体調が悪かった。小柄で痩せた体がむくみ、そのむくみを押えても、肉は指のおもみを受けたままのかたちになっていた。食欲もなく、小屋の近くの日向に敷物をひろげて横になり、村の年寄りがやってくるとしゃがんで話をしていた。

24日の夜明けとともにLバリの若者がLaの死を、2人の娘や親戚たちに知らせに走った。午前8時ころには、娘の夫たちが白い布など埋葬に必要なものをもってX集落に駆けつけた。墓穴は、ムスリム集落の南端にあるLaの家のすぐ横、中庭の端に掘られた。集まった村人とLaの親戚たちがLバリのバイレルバリで埋葬の祈りを行なう。遺体を墓穴に埋め、参列した男たちがひとすくいずつ墓に土をかけた。その横で、Lバリの女たちも少し途惑いながら何人かが土をかけた。

埋葬後、Lバリでは、参列者のうち年配の者が集まって今後について話合った。M村のムスリムだけでなく、A村、B村、D村の年寄りも話合いに加わった。村人たちは、Laの娘たちの夫(La・D1H, La・D2H)に、次のように話した。彼らはこれまでLaに借金をするなど、妻の父から経済的援助を受けていたうえ、妻が相続することになるLaの土地を使用することになる。亡くなったLaから受けた援助のお返しをしなければならない。またLaは生前礼拝を熱心にしなかったので、死後のメジュバンをきちんと行なったほうがよい。

これにたいしLa・D1Hらは、次の稲の収穫の後にメジュバンを行なうと返事をする。しかし、M村のムスリムたちは、後からといっても本当にメジュバンを実行するかどうかあやしいものだ、とLa・D1Hらの言葉を承知しない。しばらく話合って、死後10日のメジュバンを行なうことが決まった。どのくらいの費用をかけてメジュバンを行なうべきかについて、M村のムスリムからは1500タカだとか、その額では少なすぎるなどいくつかの案がでた。最終的にはMeが、牛肉に2000タカ、その他に1000タカ、合計3000タカといったところでどうか、と提案し、みながこれに同意した。La・D1HとLa・D2Hは、この費用を調達するため、妻が父から相続することになる土地の一部を人に貸す契約をしてお金をつくることにする。MeとNが、もし契約する相手がいないければ、いつでも引き受けるからと申し出た。

Laの死後のメジュバン

Laの死後5日のメジュバンは5人のフォキールのみが招かれた。村人、親戚らへのメジュバンは、3月8日に行なうことになった。その3日前、La・D1HとLa・D2Hは、妻が相続することになる土地のうちそれぞれ0.05エーカーずつの耕作権をL

バリの Lc と Lf に貸して、3000タカの費用を工面した。その日、月曜日の D バザールの定期市で1940タカのウシを購入した。2月に田植したボロ稲が実るまで、これから先の数ヶ月間の村人の経済状況は苦しくなる。人々のふところに金がないので、ウシの値段も安くなっている。年をとってはいるが大きなウシを買うことができた。

メジュバンの前日、他村に住む L バリの親戚たち (La・WZ, LaD1S1W, Lc・WM, Lf・Z, Lf・ZH) も調理の準備を手伝いに X 集落にやってきた。N バザールで米90シエルを900タカで購入し、そのほか L バリの各世帯が20シエルずつの米を出し合った。調理のため、直径1メートルほどある大きな鍋 (デシュカ) が2個用意される。1つは、現在は STU バリが共同所有しているもので、もともとは Se らの祖父のものだった。もう1つは D 村の住民から借りた。カレーを作るためのデシュカのほかに、飯を炊くための鍋が5個、合わせて7個の鍋を置くことができるように、L バリの中庭に竈を作った。

午後8時すぎ、ウシが供犠されると、L バリの者と何名かの村人が手伝ってウシの解体作業がすすめられた。手伝いに来ていた Q バリの数名が、解体の途中で肉の塊を盗んで家へ持ち去った。盗みが行なわれたことを L バリの誰も抗議せず、盗みを行なった者を咎める村人もいなかった。

ウシの解体が終了した夜中の1時ころから調理が始まった。朝の5時ころによくカレーの味付のしあげにかかる。米は、湯が鍋のなかに多少残っていても竹の敷物の上に次々とあける。大量の飯の山ができその状態で米が蒸しあがる。

La が死亡して13日目、3月8日の午前7時ころ、御馳走を食べようと人々が L バリに集まってくる。他村の村人約60名と M 村のムスリムを合わせると、200人ほどの人数になる。L バリのバイレルバリの空間は狭いため中庭でメジュバンが行なわれる。2列、3列と藁が敷かれるが、一度に全員は座りきれず、2回に分けられる。皿を持参していない者たちには、昨日から用意してあったバナナの葉が渡される。L バリの者や村人が手伝って、まず飯が配られる。メジュバンの責任者である La・D1H は、La の名前を唱えながら客1人1人の飯の上に一握りずつの飯粒を落としていった。そのあと、L バリの者たちが給仕し、バケツで運ばれたカレーがそれぞれにつがれる。みなの前に飯とカレーが揃うと、全員が両手のひらを顔の前にたて短い祈り (ドワ) をしてから食事が始まる。飯もカレーもつぎたされ、腹がいっぱいになると客人たちはそれぞれ引きあげてゆく。

最初の客たちが食事をしているあいだに、Q バリの女たちが10人ほど自分たちにも食事をさせろ、と L バリの中庭にやってくる。ところが、カレーが4分の1ほど

しか残っていない。1回目の食事に座れず待たされている者が50人ほどいるほか、La の他の村の親戚がまだ到着していない。カレーが足りないという事情を承知のうえでM村のムスリムたちは、できるだけたくさんのカレーをもらおうとする。家に帰って食べるからと洗面器ほどのサイズの大きな皿いっぱいのカレー入れて持ち去る。村のモウロビであっても例外ではない。2回目に食事に座った者たちには、充分な量のカレーをふるまうことができなかった。

事例3 MN・Mの死後の盛大なメジュバン

MN・Mと息子たち

MN・Mは、まず姉がX集落のMN・Fのもとに嫁ぎ、長男(Mab・F)と娘を産んだ。娘を出産して1ヶ月ほどして姉は下痢が続いて死亡し、その3ヶ月後、赤ん坊も同じ症状で死亡したという。妻が死亡して半年後、MN・Fは妻の妹であるMN・Mと再婚し、5人の息子(N, Mc, Md, Me, Me・B)が生まれた。MN・Fは、M村のマトッボルとして最も発言力をもっていたが7年ほど前に死亡した。

5人の息子たちのうち、4男と5男はひとつの世帯であること、5兄弟の4世帯はいずれも村では裕福な世帯であることは既に述べた。4世帯は、経済的にはそれぞれが独立した単位である。村内の政治においては利害が一致すれば団結するが、兄弟それぞれが対立するグループを支持することもある。兄弟のあいだでとくに強い発言力をもつ者はいない。ただしMeは、他の兄弟にくらべて村内外の政治的活動に関与しようとする傾向が強い。かつての村落政府²⁴⁾の村長、政府から資金融資を受ける活動のユニオンのマネージャーなどの経験をもつ。ジュートの仲買いなどの商売もてがけ、バザールや地域の住民との交流も他の村人より活発である。

MN・Mの死

MN・Mは死ぬまでMeの世帯員として生活していたが、寡婦となったあとはMパリの中庭のなかの自分の小屋に居住していた。歩行が困難となり老衰がすすむと、Meの住居に移された。痴呆が始まり、食べてない食べてないと1日何度も食事を要求した。たびたび床のなかで排便し、ひどい臭いが部屋に漂った。夜になると悪魔を恐れて、死んでしまうとわめいて泣いた。Meの妻が、布団をとりかえ、MN・Mの体を毎日石鹸で洗い、夫の母親の世話をすべてみていた。

24) 1980年5月から、アユブ・カーン大統領のもとですすめられた「自立的村落政府」計画、モウザを単位とした地方行政改革の試み。1981年に大統領の暗殺とともに中途半端なかたちでながれる。

1990年6月28日の木曜日午前10時、MN・M は息をひきとった。1 日前に、ダッカに住む Me・B も母親を見舞うため X 集落に戻っていた。孫たちが、バイクや自転車を使って祖母の死を親戚の村々に知らせた。すぐに埋葬の準備が始まる。午後4時には埋葬の礼拝が行なわれ、集落のモスクの裏に遺体が埋められた。葬式には他の村々からも多くの人々が集まり、埋葬後も弔問客が続いた。

埋葬の翌日、Me は村人を集め、母親のフォイタを実行するにあたっての協力を求め、村人はこれに同意した。フォイタとは、人の死後任意の日に行なわれる規模の大きなメジュバンのことである。次の週の金曜日にフォイタを行なうことになった。死後5日目は、5人のフォキールだけを招き、飯と豆スープだけの質素な食事をふるまった。

フォイタ

フォイタの5日前、Me の指示により村の十数人の若者が、周囲の村々から、皿として使うため大量のパナナの葉を集めた。4 日前には、フォイタのために供儀するスイギュウとウンを、それぞれ6700タカ、4300タカで購入し、そのほかにも、香辛料2880タカ分、油400タカ、米300シェルなど調理に必要なものを買そろえた。燃料に使う薪は、林を所有する Me の妻の父が提供し、運搬料100タカを Me が負担した。MN・M の5人の息子たちは、この負担を均等に出し合ったのではない。長男 N が2400タカ、次男 Mc、3 男 Md が各2000タカ、Me と同じ世帯の4 男 Me・B が1000タカ、そして残りはすべて Me が負担した。かかった経費の半分以上を Me が1人でまかなったことになる。

何百人分ものカレーを作るため9個のデシュカを借りた。X 集落の1 個以外は、A 村から1、D 村から4、Md の妻の実家から1、Me・B の妻の実家から1、Qd の母の実家から1のデシュカが調達された。M バリではフォイタの3 日前から、女性たちが香辛料を足踏み式の精米具で粉にする作業を始めた。

フォイタの前日、雨が止まない。ウンとスイギュウをいつ供儀しようかと Me らがバイレルバリのゲストハウスで話合った。ゲストハウスのなかでまずウンを供儀し、解体作業にとりかかる。夕方、雨が止むと、バイレルバリでスイギュウを供儀することになった。しかし、M 村の村人たちはだれも、これほど大きなスイギュウを供儀したことがない。どうやってスイギュウを倒して押さえつければよいものか。ここで Me の妻の実家からやってきた妻の弟 Me・WB (14才) が活躍する。Me・WB の村では、イードの大祭の動物供儀を各家で行なうのではなく、供儀動物を村の一ヶ所に集

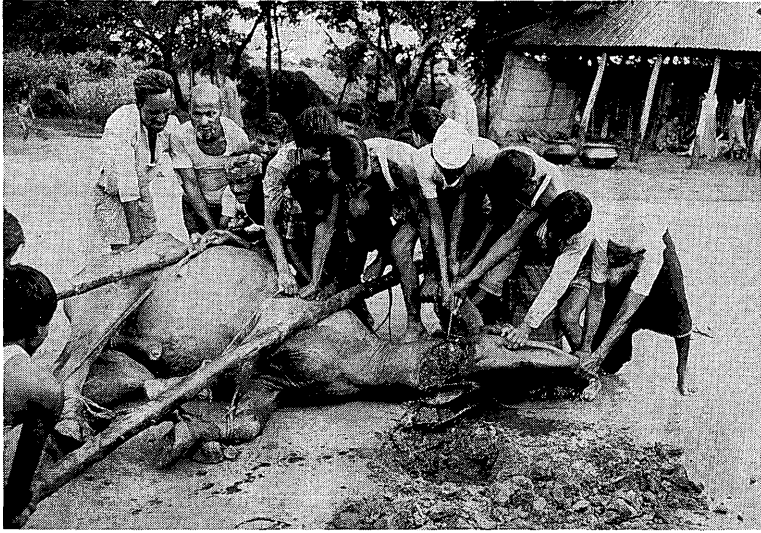


写真4 スイギュウの供儀 (MN・Mのフォイト)

め、そこで村人が共同で供儀・解体を行ない肉を分配する。Me・WB も毎年一度に何頭ものウシの供儀をみている。

Me・WB は、スイギュウの下に入り、1本の綱で牛の前脚、後脚を2本ずつまとめてしぼる。そして牛の角に別の綱をかけ、前から2人の人間がその綱を引っ張る。後からは脚にくくりつけた綱を5、6人の人間が引っ張る。脚の綱は、引っ張ると牛の4本の脚が一つに近づき、バランスを崩して牛が倒れるしかけになっている。MNバリの者たちは指図はするが、ウシ・スイギュウの解体の具体的な作業にはあまりかかわらない。他の世帯の有志や、MNバリの年契約労働者たちが労働力を提供する(写真4)。

ゲストハウスの前に直線に長い穴を掘り竈が作られた。9個のデシュカのほかに米を炊く鍋を8、9個置かなければならない。雨の心配があるので竈の上に竹とトタンで即席の屋根をつけた。こういった大きなメジュパンの料理の名人であるA村の1人の村人に、調理の手助けを頼む。彼の指示のもと一晩かかって大量のカレーがあがった。外が明るくなっても小雨が止まず天候が心配された。人数が多いので部屋のなかで食事をふるまうことはできない。

午前7時前、雨も止み周囲の村から続々と人がやってきた。直接招待を受けた親戚、知人だけではない。メジュパンは、声をかけられなくとも男であれば誰が参加してもよい。総勢600人ほどの人々がMバリのバイレルバリに集まった。飯が炊きあがるの



写真5 MN・Mのフォイタ（約600人に食事がふるまわれた）

が遅れたので、集まった人々は1時間くらい待たされたのち、バイレルバリに藁を敷いて7, 8列に並んで座る。バナナの葉が渡され、そこに飯がつがれる。給仕はM村のムスリム男性が行なう。全員で短い祈りをしたあと、カレーがそれぞれの飯にかけられてゆき食事が始まる。食事のあいだ、通路では飯の入った籠やカレーの入ったバケツをもった村人が、客人のバナナの葉のうえにそれらをつぎたしていく（写真5）。M村のムスリムの子供たちは、自分で皿をもってきて、客人とともに食事をしたが、大人たちは、他村の村人が食べ終わって帰ったあと食事をとった。

以上葬送儀礼について3つの事例を記述してきた。この3例を比較しながらその性格の違いをまとめ考察をくわえる。葬送儀礼が行なわれる対象となった3人の死者は、事例1は、M村に移住してきた1人暮らしの男性であり、土地も共に暮らす家族ももたない。事例2は、M村で生まれ育ち、零細地片を所有し、妻と2人暮らしをしていた貧しい世帯の老人である。事例3は、かつてM村のマトッボルだった男性の妻であり、息子たちはいずれも経済的に裕福な世帯である。

事例1, 2のUcもLaも、村では最も貧しく、両者とも村の社会、政治関係に大きな影響力をもつ存在ではなかった。しかし、この2人の葬送儀礼にかかわる村人の態度は対照的である。それは、2人の性格や生前の行ないによるものではなく、むしろ故人のX集落内外での親族関係と彼らが死後何を残したかによる。

Uc は他村の出身であり、生前何度か居住地を変えており、X 集落とその周辺には多くの親族関係をもたない。また、多少の借金以外に利害関係をひき起こす財産を何も残さなかった。村人たちは、X 集落で息をひきとった Uc のために、ムスリムとしてひととおりの埋葬が行なわれるよう協力している。Uc の葬式は、村人が寄付を集め埋葬に必要な竹を提供している。U バリの男性が中心となって、近隣の者たち、とくに隣の S バリの男性が積極的に労働力を提供している。村人を招いてのメジュバンは行なわれず、死後40日目に、2名のフォキールと数名の者に食事がふるまわれただけである。

La の場合は、0.55エーカーという土地を残し、その土地はいずれは他村に婚出した2人の娘が相続しその夫 La・Da1H と La・D2H が利用することになる。このため村人たちは、死亡した La にたいしてではなく、葬送儀礼をとりしきる La・D1H と La・D2H にたいして厳しい態度をとっている。M 村のムスリムたちは、彼らに死後のメジュバンを行なうことを強要するだけでなく、その規模まで指示する。費用は、L バリの者たちが多少の米を出し合っただけで、そのほかの村人は金銭、物品での援助をまったく行なっていない。さらに、メジュバンを行なうため供犠された肉の一部を盗む者がいれば、メジュバンの当日も、L バリにやってきた人々すべてに食事がふるまわれるかどうかなどの配慮はなく、通常はこうしたメジュバンに顔を出さない女性までもがわざわざ L バリにやってきて食事を要求している。La のメジュバンは、200人ほどに食事をふるまう X 集落のなかでは規模の大きなメジュバンであったが、村人たちは、それが自分たちの集落の行事であるとはとらえていない。

3つめの事例、MN・M のフォイタについては、主催者たちの意識と、M 村のムスリムの集団意識という2つの側面に留意したい。MN・M の葬送儀礼の主催者は、彼女の5人の息子たちである。しかし、5人の息子は、自分の母親のフォイタの費用を5等分に分割せず、Me がその半額以上を負担している。こうしたことは珍しいことではない。M 村では、たとえば寄付、援助、施しが、村人や世帯に均等に課せられたり、収入や社会的序列によってランク分けして要求されたりすることはない。村人各人がその額を決める。結婚式や葬式の費用にたいする援助、村内で行事のための資金が村人から集められるときは、誰かがボランティアで集落の家々をまわって現金や物品（たとえば米）を集める²⁵⁾。その際、援助をするかしないか、あるいはその額、量はその人の気持ちだである。援助の対象者によって寄付や援助の額が左右されるが、そのほかに自分の社会的位置を他者がどのように評価するかを意識している。そ

25) 結婚式の援助は、M 村のムスリムとヒンドゥーのあいだでも行なわれる。

それぞれの援助の額は発表されるわけではないが、あえて隠されているわけでもなく、誰でもそれを知ることができる。援助の金額や量の差は、出資した者としない者、そして出資者のあいだでの差異を人々に示すことになる。

MN・M のフォイタの場合も、出資金の大きな差は、兄弟が費用負担をなすりつけあった結果ではなく、それぞれの経済状況をそのまま反映したものでもない。むしろ、5人の兄弟がそれぞれの意志にもとづき金額を調整した結果である。Me は、費用の多くを負担することによって、儀礼の主催者の1人として他の兄弟たちと区別される。大規模なフォイタの総指揮をとったのは Me であり、フォイタの成功、失敗の評価、他人の注目は他の兄弟たち以上に Me に向けられる。Me 自身がそれを意図している。

MN・M のフォイタは、600人ほどに食事をふるまう盛大なものとなったが、MN・M の死を悼むというよりは、フォイタの主催者の「力」を誇示するものであった。そこには、フォイタをとりしきった Me と、M 村のムスリムの面目がかかっていた。このフォイタは、他のメジュバンと違い、客人の大半は他の村人であり、フォイタの成功、不成功は地域の人々の関心を集める。規模が大きなメジュバンは当然村人の労働提供があってはじめて可能となる。他村の人々にとってそうしたメジュバンのホストは、メジュバンの資金を出しそれをとりしきる主催者であると同時に、その主催者が属する集団である。これは、Me 個人の面目をたてることとは無関係に、M 村のムスリムたちにとって重要な問題である。規模の大きなメジュバンの失敗は、後々まで人々の語り草となる。どれだけの人数が集まるかの予測を過ぎて調理した食事の量が足りなかった××村の△△のメジュバン、□□パラの大きな空き地に大量の食事を用意したが悪天候のため食事をふるまうタイミングをのがし、結局食事を腐らせてしまった話、といったぐあいに。MN・M のフォイタは、バナナの葉の収集、ウシ、スイギュウの供儀、解体、調理、給仕にいたるまで、M 村のムスリムたちがそれぞれ全面的に協力して、無事にフォイタを終了させた。

3. 考 察

2章でとりあげた諸事例では、金銭、物品での返済を求めない一方的贈与のさまざまなかたちがみられた。ヒジュラ暦にもとづくアシュラパロン、ルティタワ、断食明けのイードのフェットラ、犠牲祭での動物供儀の肉の分配、ウシの皮を売却した収益によるマレールタカ、神に現世での救済や利益をもとめるチンニ、週の施しであるパールビッカ、葬送儀礼における死後のメジュバン、村人からの援助などである。こうし

た一方的贈与をめぐる、誰が贈与の受け手となるか、贈与者と受贈者の世俗における二者間関係、第三者の評価という3つの問題を考察してゆく。

「貧者」は誰か

イスラムの教えにおいて、喜捨は、信者の5大義務（信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼）の一つにあげられている。施しや犠牲祭における肉の分配、食事のふるまいはM村のムスリムに限らず、他の地域のムスリムのあいだでしばしばみられる。Werbner [1990] は、イギリスの産業都市、マンチェスターのパキスタン人移民社会の形成と、そこでのムスリムの贈与交換をめぐる儀礼的、社会的関係について論じるなかで、次のように述べている。「パキスタン人の移民たちのあいだでは、贖罪、罪滅ぼし、あるいは神の恩恵をえるためには、放棄と無私の寛容さを示すべきだと考えられている。供儀や供物によるコミュニケーションは、貧しい人々を媒体とすることによってのみ成しうるものである。貧しい人々なくしての供儀も供物も不完全なものである。…ところが、マンチェスターのようなところでは、そうした「貧者」はみあたらない。労働者移民にとって、故郷を離れた地での供儀や供物は、そうした行為の意味を妥協、あるいは歪曲したかたちで行なわれることになる」²⁶⁾。

神とのコミュニケーションの媒体として、供儀や供物の受け手となる「貧者」の存在をめぐる、イギリスにおけるパキスタン人移民の社会とは状況が大きく異なるが、バングラデシュの農村であっても本質的には同様の問題が存在しうる。誰を宗教的贈与の受け手としての「貧者」とみなすかは、宗教的にも社会的にも明確な判断をくだすことの困難な問題である。

ムスリムの喜捨や贈物の宗教的価値は、財の放出という行為に重点がおかれ、受贈者の資格、資質については宗教上厳密には規定されていない。近親者、孤児、貧者、困窮者、物乞、旅人などへ財を費やすことが説かれているが、しかし、どのような条件をもった人が貧者や困窮者にあたるのか、どのような贈与を誰に渡すべきなのかが細かく規定されていない。また、受贈者が誰であっても、たとえ施し物を「盗人」や「金持ち」に与えたとしても、喜捨の価値そのものが減ずるものとはみなされていない²⁷⁾。筆者の調査地は、Parry [1989] や Raheja [1988] が論じているヒンドゥーの場合のような、贈与者の凶が受贈者に転化されたり、不適当な相手に贈与したため贈与者が不吉さを被るとは考えられていない。

誰を「貧者」とみなすか、誰が宗教的贈与の受け手となりうるかは、世俗での社会

26) Werbner [1990: 154]。

27) 『ハディース』(牧野信也訳) [1993: 382-383]。

的判断にもとづく。しかし、貧しさとは相対的なものである。バングラデシュでは、「貧しい」(ゴリーブ)という言葉が頻繁に耳にする。「貧しい者」であることを自称する人々も多くいる。だが、人々の意識のなかで、社会が階級に分かれていたり、「貧しい者」に属する人々の明確なカテゴリーや既存の集団があるわけではない。社会全体がカーストのような出自集団によって区分されていたり階層化されているわけでもない。また、社会のなかにたとえ「貧しい」人々と判断されるカテゴリーが存在するとしても、その貧困層に含まれる人々にとっても宗教的贈与の受け手が必要となる。

宗教的、社会的な規範のほかに、さらに一方的贈与の受贈者となることについての個人的な感情レベルの問題がある。宗教的贈与を行なう人が、その対象として誰を「貧しい者」とみなすかということと、その「貧しい者」が自分を受贈者と認めることができるか、という問題は異なる。返済を必要としない贈与を受け取ることについての、その人がもつ考え、威信、プライドといったものは個々人によって様ではない。それでは誰が、こうした贈与の受け手となるのだろうか。

M村のムスリムの一方的贈与の受け手は、①自ら施しを求める人、②援助の必要性が認められる人、③住民一般、と大きく3つに分類できる。

①は、調査地ではフォキール、フォキルニとよばれているムスリムの物乞である。彼らには、施しの曜日のパールピッカが渡される。このほかフォキールは、神への感謝・祈願のための施しであるサドカを受け取ることができ、またヒジュラ暦にもとづく食事のふるまいや、死後のメジュバンに招かれる。

②は、ひとつは社会的経済的に弱い立場にある人、たとえば高齢の寡婦や、経済的収入を男性に依存することができない世帯の女性などである。こうした者へ宗教的贈与が与えられる機会はX集落では非常に少ない。断食明けのイードのフェットラ、犠牲祭り供儀獣の皮を売却した収益によるマレールタカだけであり、受贈者となるのは近親者や以前から何らかの付き合いのある者である。もうひとつは、特別な一時的「事情」にたいしての援助を必要とする者である。M村では、村人の結婚式や葬式など特別な出費にたいして、現金や米が集められる。

③は、受贈者の個人的な立場や状況を問わない贈与の受け手である。X集落において、供儀獣の肉が分配される世帯や、葬送儀礼などのメジュバンの客人の多くは、「貧者」や「困窮者」といった条件つきの人々ではなく、隣近所に住む人、M村のムスリム、親戚、あるいは不特定多数の「一般の人々」である。

一方的贈与の受け手について、最もはっきりとしたカテゴリーは①の物乞である。施しと援助は、どちらも返済しないという意味では同じ一方的贈与であるが、人々は

「施し（ビッカ）」を求めることと「援助（サハッジョ）」を求めることをはっきり区別している。調査地で「施しを下さい」といって直接施しを要求するのは、物乞だけである。村々を援助を求めてまわる人はいる。火事で家が全焼してしまった、親の葬送儀礼の費用のため、息子に教育を受けさせたいから、娘のダウリーのため、などその理由はさまざまであるが、自分がおかれている特別な「事情」にたいしての援助を求めているのであって、モノゴイをする物乞としてではない。そうした人々は、決して施しという言葉を用いず、「援助してください」という。人々の意識のなかでは、経済的な困窮者と物乞とのあいだには大きな隔たりがある。

他と区別された明確なカテゴリーとして「物乞」が存在することは、宗教的贈与の受け手を確保し施与の機会を万人に開くという意味で重要である。上述したとおりどの個人が贈与の適当な受け手であるかを判断することは、宗教的にも社会的にも、感情レベルの問題においても難しい。そのなかで、フォキール、フォキルニとよばれる施与の受け手の「専業者」が、ひとつの職業として社会に認められている。物乞の存在はまた、経済的状况、性別を問わずあらゆる人々に施与を行なう機会を与える。生活が困窮していても、一握りの米を物乞に与えることはでき、公の場での宗教行事の参加を規制されている女性も、物乞への施しについては、自分の意志で自らが行なうことができる。多数の客人を招くことはできなくとも、ただ一人のフォキールを食事に招待することによって葬送のプロセスを終えることができるのである。

一方的贈与をめぐる二者間関係

ムスリムの一方的贈与は、人と神とのあいだのコミュニケーションの一形態であり、財の放出という行為に宗教的価値がおかれる。その贈与はしかし、世俗においては、人と人のあいだでやりとりされる。一方的贈与は、モノの与え手と受け手のあいだに社会的優位者と劣位者といった位置づけや力関係を認めさせ、ときには支配と従属といった上下関係を生みだしうる。こうした可能性をもつ一方的贈与について、M村のムスリムの事例において興味深いのは、与え手と受け手のあいだに個人的な二者間関係が生じることが回避される傾向にあることである。

上述した受贈者の3つの区分のうち①の物乞への施しは、施しの曜日、モノゴイや施しの手順が定まっている。とくにフォキールは、通過儀礼、服装、モノゴイの仕方、に宗教的要素を含んだ一定の様式がある。物乞たちは、施しを求めるたびにその理由を述べる必要はなく、施しを与える側も、施しを渡すという動作以外の物乞にたいする個人的な応対を省くことができる。物乞への施しは、施しを求めるその人の個人的

な事情や生活状況にたいしてではなく、フォキール、フォキルニという職業の肩書にたいしてのものである。

物乞はまた、何人かの特定の個人の庇護に頼って生計をたてているのではない。彼らは、一週間に、数十の村々、数百の家々をまわる。与え手一人一人からは、ほんのわずかな量の施しを受ける。物乞は、個人的な二者間関係ではなく、地域の施しの習慣、物乞を受け入れる社会の仕組に依存して生活している。

受贈者の分類②の援助の必要性を認められる人への贈与、断食明けのイードのフェットラ、犠牲祭のマレールタカは、受け手からの要求に応ずるのではなく、与え手から自主的に渡される。受け手は、物乞のような匿名的な存在ではなく、以前から個人的なつきあいがある近親者、村人、知人である。贈与によって新たな関係が生ずるといよりは、すでに築かれている関係があるゆえにその人に贈与がおくられる。こうした近親者への贈与の機会は少なく、受け手が物乞のように贈与に依存して生活しているわけではない。贈与者と受贈者のあいだには、社会的上位者、下位者という認識が共有されるが、その力関係を上位者が政治的に利用するには、そこでの下位者は社会的にあまりにも微力である場合が多い。

M村のムスリムの葬式や結婚式など資金援助は、村人それぞれが自発的に行なうものではない。人々のあいだに式や援助についての話がもちあがり、それから誰かが集落のなかを米や現金を集めにまわることが多い。この場合、受贈者は、村人一人一人から個別に援助を受け取るのではなく、集められたコメや現金をまとめてもらうことになる。当事者が援助を求めて集落内の家々をまわることもあるが、いずれにせよ村のなかでの援助は、与え手と受け手の1対1の閉じられた二者間関係ではない。複数の与え手が一人の受け手に贈与をおくる多数対1の関係であり、またここでの援助は人々の話題や視線に公開されている。

③の一般の村人を招く食事のふるまいについては、主催者と招待者のあいだで、あるいは客人どうしが、メジュバンをとおして個人的な人間関係を作り出すという意図はみられない。主催者には、死後のメジュバンに他村の親戚をあえて招待する以外には、特定の個人をメジュバンに招待したという意識はうすい。ホストにとっては、招待客の個人名よりも、自分が計画している規模に応じたメジュバンが達成されることが重要である。メジュバンの参加者は、主催者の宗教的行為に協力して御馳走を食べたのであって、それに対して返済の義務や精神的負担を負うものとは考えられていない。またメジュバンの主催者と客人のやりとりは、食事を給仕し、それを食べることのみである。客人は食事を終えた順にひきあげてゆく。メジュバンそのものが社交の

場とはなっていない。

M村のムスリム集落の一方的贈与は、異なる階級や特定の社会集団に属する人々のあいだでのやりとりではない。また、より裕福な人からより貧しい人への財の流れであると単純にとらえることはできない。さまざまな個人が与え手となりさまざまな個人が受け手となる。そこでの二者間関係は、贈与の種類によって一様ではない。しかし、いずれも贈与をとおして個人と個人のあいだに新たな二者間関係が生じることは少ない。贈与が、受け手にたいする力関係を強調したり従属を求める手段として利用されたり、受け手が特定の個人からの庇護を受ける機会にはなっていない。一方的贈与が日常の村人どうしのつきあいに及ぼす影響を、M村のムスリムのあいだではむしろ最小限にとどめられている。

第三者の評価と対外意識

一方的贈与は、実際にはモノをめぐる二者間のやりとりで完結されるものではない。そこには、第三者の評価が介在する。本稿で扱った一方的贈与の多くは、第三者の視線と人々の情報網に開かれ、その評価を可能にするかたちで行なわれている。施しを求めて村々を巡回する物乞には、贈与者についての情報を持ち歩くという性格が付随してくる。村人からの募金は、誰が援助したかやその金額があえて公表されるわけではないが、誰でもそれを容易に知ることができる。食事のふるまいは、規模が大きければ集落内だけではなく、地域の人々の話題となる。

ある個人が一方的贈与をどれほど行なうかは、その人の経済的状況や信仰の深さをそのまま表わしているのではなく、そこには第三者の評価を受けることへの期待が含まれている。M村のムスリムのあいだでみられる一方的贈与の多くは、その規模は小さくひとつひとつが贈与者の社会的位置づけを決定するほどのものではない。しかし、そうした一方的贈与が村人の日々の暮らしのなかでさまざまに積み重ねられ、村人のあいだの差異を作っていく。

調査地のムスリム個人の社会的位置づけは、その人の出自集団や、村落、ジョージ内での地縁関係、血縁関係や役職などによって、明確にランクづけされているわけではない。個人や世帯をめぐる経済的状況も常に不安定である。そのなかで、ある人が自らを社会のなかに相対化し位置づけていく一つの回路として、本稿で扱ったようなさまざまな一方的贈与が大きな意味をもっている。

社会的評価は、ときに贈与者を含む社会集団が評価の対象となる。第三者に対する意識が集団内の人々を結束させ、普段は見えにくい社会単位を集団として機能させる。

本稿で扱った贈与をめぐる社会関係は、集落の親族、地縁、雇用などの社会関係に規定されるものではない。しかし、犠牲祭、MN・M のフォイタ、La のメジュバン、この3つの事例では、それぞれ異なるかたちでの社会的境界や集団意識があらわれている。犠牲祭の肉の分配では、人々がどこに一つの社会的な境界線をひいているか、そして何をその境界の内側の構成員とみなしているのかがわかる。MN・M のフォイタでは、主催者を含む「M村のムスリム」という社会集団がホスト役となり、そこでの対外意識が、村人を結束させ集団として機能させる契機となっている。La のメジュバンでは、X集落の住民の死にともなうX集落内で行なわれたメジュバンでありながら、主催者が他所者であることによって、メジュバンにたいするM村のムスリムの立場はあいまいなものとなり、そこでは統率のとれた村人の行動はみられない。

バングラデシュ農村では、集団にたいする権利や義務、強い帰属意識をもった構成員からなる社会単位を見出しにくい。居住単位や行政単位を、既存の組織やその機能からとらえたり、人々の生活の場を一つの社会単位に集約させて分析することは難しい。しかし、集団意識や組織性がないのではない。人々は潜在的ないくつかの社会的境界を共有し、何かの機会を契機にそれが集団として顕在化し機能する。本稿で扱った事例では、第三者の評価、対外意識が、「M村のムスリム」を集団として機能させる重要な要素となっている。

以上、調査村のムスリム集落のさまざまな一方的贈与をとおして社会関係の特徴を考察してきた。本稿で指摘した二者間関係の回避や第三者の評価の重要性は、一方的贈与をとおしてのみみられるのではなく、社会関係について村人が抱いている相異なる2つの志向が、一方的贈与をめぐる社会関係に反映されていたのではないかと思う。ひとつは、村人どうしの二者間関係において劣位に位置づけられたり力関係が生じることを回避しようとする志向、もうひとつは、村人のあいだでの経済力などの差異を第三者の評価をとおして社会的により上位に位置づけようとする志向である。

これまでのバングラデシュ研究では、村人のあいだの経済的格差や、階級分化、階級間の力関係については強調されてきた。しかし、経済的格差をどのようにして社会的文化的に意味づけるか、社会的序列や力関係をいかに回避しようとするか、人々が何を契機にどのように集団として結束するか、といった問題については十分に研究されてこなかった。この論文では、一方的贈与という限られた側面からの考察ではあったが、こうした問題について扱うことができたのではないかと考えている。

謝 辞

本研究のもととなったバングラデシュでの実地調査は、トヨタ財団から1987年度研究助成を受けて始められ、その後1992年度日本学術振興会特別研究員として研究を続けることができました。バングラデシュでは、JSARDとダッカ大学 Centre for Social Studies の関係者の方々に、ご指導と励ましを受け、M村の村人や友人たちにはさまざまなかたちでお世話になりました。本稿はまた、国立民族学博物館の共同研究「宗教体系と民族誌記述の方法」の第1回研究会（1992年6月19-20日）における研究報告にもとづくものです。金沢大学の鹿野勝彦先生からは、草稿を読んでいただき貴重な助言を受けました。これらの方々に謝意を表します。

文 献

安藤和雄・河合明宣

1989 「ベンガル・デルタ村落形成ノート」『農業史年報』3: 39-56。

1990 「ベンガルデルタの村落形成についての覚え書」海田能宏編『バングラデシュの農業と農村——農村発展のための共同研究——』京都大学東南アジア研究センター, pp. 354-368。

ARENS, J. and J. VAN BEURDEN

1977 *Jhagrapur: Poor Peasants and Women in a Village in Bangladesh*. Orient Rongman.

BARMAN, D.

1988 *Emerging Leadership Patterns in Rural Bangladesh: A Study*. Centre for Social Studies.

BERTOCCI, P. J.

1970 *Elusive Villages: Social Structure and Community Organization in Rural East Pakistan*, Ph. D Thesis, Michigan State University.

CHON, B. S.

1991 (1968) Notes on the History of the Study of Indian Society and Culture. *An Anthropologist Among the Historians and Other Essays*, Oxford, pp. 136-171.

ELLICKSON, J.

1972 *A Believer Among Believers: The Religious Beliefs, Practices and Meanings in a Village in Bangladesh*, Ph. D Thesis, Michigan State University.

JANSEN, E.G.

1987 *Rural Bangladesh: Competition for Scarce Resources*. University Press Limited Dhaka.

鹿野勝彦

1991 「北インド農村における経済交換と社会関係——ウッタールプラデシュ州ハルDOI県の事例から——」『金沢大学文学部論集 行動科学科篇』11: 37-65。

1992 「北インドのナーイー（「床屋」カースト）——ウッタールプラデシュ州ハルDOI県の事例から——」『金沢大学文学部論集 行動科学科篇』12: 79-106。

KOTALOVÁ, J.

1993 *Belong to Others: Cultural Construction of Womanhood Among Muslims in Bangladesh*. Acta Universitatis Upsaliensis.

牧野信也（訳）

1993 『ハディース』上巻 中央公論社。

西川麦子

1992a 「ムスリムの女性の物乞『フォキルニ』——物乞を生み出すバングラデシュの農村の社会的背景——」『年報人間科学』13: 83-96。

1992b 「バングラデシュの農村のムスリムの物乞、『フォキール』『フォキルニ』」『民族学研

- 究』56(4): 385-406。
- 1992c 「職業としての物乞——バングラデシュ農村『施しの曜日』」『季刊民族学』60: 36-42。
- 大塚和夫
1989 『異文化としてのイスラーム——社会人類学的視点から——』同文館。
- PARRY, J.
1989 On the Moral Perils of Exchange. In J. Parry and M. Bloch (eds.), *Money and the Morality of Exchange*, Cambridge University Press, pp. 64-93.
- RAHEJA, G. G.
1988 *The Poison in the Gift: Ritual, Prestation and the Dominant Caste in North Indian Village*. The University of Chicago Press.
- 嶋田義仁
1993 『異次元変換の政治人類学——人類学的思考とは何か——』勁草書房。
- 高田峰夫
1991 「『農民社会』・『農民』・農業外労働——バングラデシュの職業構造の事例から——」『民族学研究』56(1): 20-44。
- WERBNER, P.
1990 *The Migration Process: Capital, Gifts and Offering Among British Pakistani*. Berg.